

敷島町文化財調査報告 第21集
(山梨県)

村 続 遺 跡

大型店舗建設工事に伴う奈良・平安時代遺跡の発掘調査報告書

2004

敷島町教育委員会
敷島町文化財調査会
株式会社 コメリ

敷島町文化財調査報告 第21集
(山梨県)

村 続 遺 跡

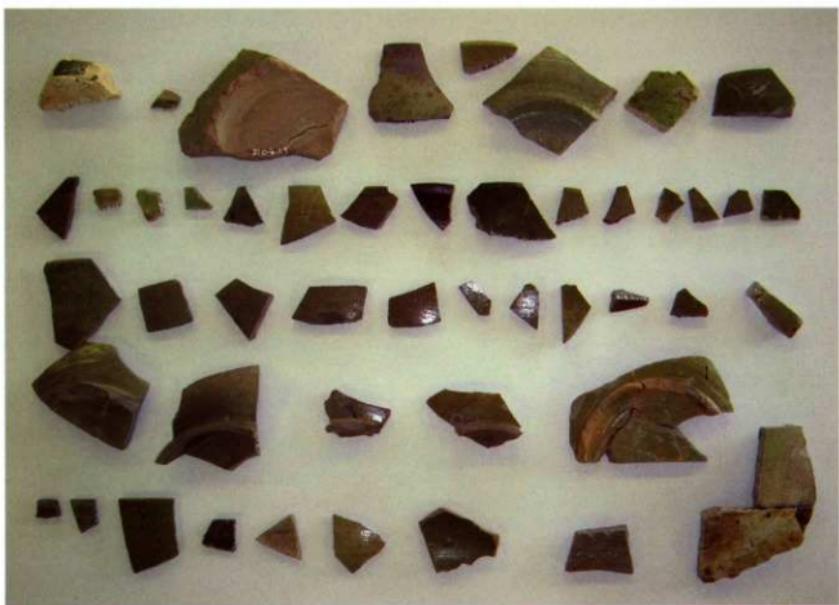
大型店舗建設工事に伴う奈良・平安時代遺跡の発掘調査報告書

2004

敷島町教育委員会
敷島町文化財調査会
株式会社 コメリ



村続遺跡第Ⅰ次調査区全景



1. 緑釉陶器



2. 貿易陶磁器 - 白磁 (皿 XI 類他)・青白磁 (合子蓋)・青磁・天目 -



3. 銅製仏像の台座 (14号住居跡出土)

序 文

敷島町は、甲府盆地の北西部に位置し、南北に細長く北は茅ヶ岳や太刀岡山などからなる山間地域で、盆地に面した南部は荒川の扇状地形となっております。最近では、南部地域を中心に年々人口が増えてきており、これに比例するようにとくに町の南部では開発が多く、緊急となる埋蔵文化財の発掘調査が頻繁に行われてきております。

本町は、すでに南側の扇状地上に多くの遺跡の存在が確認され、大昔から人々が生活するのに適した環境であったことが窺えます。

これまでに多くの遺跡を調査してきましたが、敷島町を代表する遺跡として弥生時代の大きな集落跡と墓域がセットで発見された『金の尾遺跡』や白鳳時代(7世紀後半)まで遡るとされ、県内でも一番古い瓦窯となる『天狗沢瓦窯跡』などが上げられます。

さらに、最近の調査では、主に古墳時代後半から平安時代末頃までを通じて継続的に営まれた『松ノ尾遺跡』の存在が明らかとなりました。大量の遺物の中には、瓦、円面鏡、帶金具、中国産陶磁器などのほか、平安時代末頃とみられる金銅製小仏像が2軀発見されるなど、甲斐国巨麻郡における重要な地域の一つではなかったかと考えられております。

本書は、平成14年に大型店舗の開発に伴いおこなわれた敷島町島上条に所在する『村続遺跡』の発掘調査報告をまとめたものです。

調査の結果、住居跡が計36軒確認され、およそ8~12世紀の奈良・平安時代をとおして長い期間に営まれた集落跡の一角が発見されました。また、数多くの縄文陶器や中国産の陶磁器類などのほか、住居跡からは銅製小仏像の台座が出土し、上述した『松ノ尾遺跡』と並んで本地域においてかなり特殊な遺跡であることが明らかとなり、今回ここに報告する運びとなりました。

本報告書が、わが町、わが郷土の歴史研究の一助となるとともに、地域文化の発展に寄与できるよう切に願っております。

これからも、後世の人々のために調査・記録を精密に行い、さらに教育普及へと役立てていけるよう努力してまいります。

最後に、株式会社コメリ及び地権者の文化財保護に対する深いご理解の下、調査が実施できましたことに感謝するとともに、ご指導、ご協力いただきました関係各位に心より厚く御礼申し上げます。

平成16年4月

敷島町教育委員会

教育長 山口正智

例 言

1. 本報告書は、山梨県中巨摩郡敷島町島上条地区に所在する村統遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、株式会社コメリの店舗建設に伴って実施した発掘調査である。発掘調査から報告書刊行までの経費は株式会社コメリが負担した。
3. 発掘調査は、平成13年4月9日～同年6月8日までの約2ヶ月間、また平成14年10月から平成16年4月にかけて断続的に整理調査をおこなった。
4. 調査組織は次のとおりである。

調査指導・主管	敷島町教育委員会
調査主体者	敷島町文化財調査会
調査事務局	敷島町文化財調査会
調査指導担当者	大窓正之（敷島町教育委員会生涯教育課社会教育係副主査） 小坂隆司（敷島町教育委員会生涯教育課社会教育係嘱託）
5. 本書の執筆・編集および遺物の写真撮影は小坂が担当し、遺構の撮影は大窓と小坂で分担した。
なお、瓦の胎土分析は帝京大学山梨文化財研究所に委託し、その結果を第3章にて河西 学がまとめた。
6. 発掘調査と報告書作成にあたり、次の方々よりご教示を賜った。ここにご芳名を記し、感謝申し上げる。

小野正敏（国立歴史民俗博物館）、萩原三雄、平野 修、櫛原功一（帝京大学山梨文化財研究所）
中込司朗、坂本美夫、羽中田壯雄、飯野正仁、畠 大介（敷島町文化財審議会）
百瀬正恒（京都市埋蔵文化財研究所）、八重畠忠郎（平泉町教育委員会）、大庭康時（福岡市教育委員会）
合田芳正（中央大学）、手塚直樹（青山学院大学）、小林公治（仮称九州国立博物館準備室）
猪股喜彦、瀬田正明（一宮町教育委員会）、佐野 隆（明野村教育委員会）、山下孝司、閑間俊明（並崎市教育委員会）
田中大輔、斎藤秀樹、保坂太一（南アルプス市教育委員会） （以上敬称略、順不同）
7. 発掘調査ならびに整理作業参加者（敬称略）

青山制子、飯塙久美恵、石川弘美、長田由美子、小林明美
関本芳子、高添美智子、堤 吉彦、保坂広昭、保延 勇、望月典子
8. 本遺跡の出土遺物および調査で得たすべての記録は一括して敷島町教育委員会に保管してある。

凡 例

1. 遺構構図中、———は硬面化の範囲、■は焼土を表示している。
2. 遺物構図中、断面白抜きは土師器・土師質土器、黒塗りは須恵器・瓦、■は陶器類、■は磁器を表す。
また、土器表面の■は黒色処理を表し、■は擦り面、■は朱墨痕の範囲を示す。
2. 遺構内出土遺物は4桁で表し、前二桁は住居No.、後2桁は遺構内の遺物ナンバーを表現している。
3. 観察表中の計測値（）は推定値である。

(例)	0 6	0 8
住居No.	遺物No.	
4. 図版中、遺構と遺物の縮尺は統一されていない。

本 文 目 次

序 文	遺構と遺物
例 言・凡 例	1. 住居跡と出土遺物 ······ 4
第1章 遺跡をとりまく環境	2. その他の遺構 ······ 31
1. 遺跡の立地と環境 ······ 1	第3章 村統遺跡出土瓦の胎土分析 ······ 37
2. 周辺遺跡と歴史的背景 ······ 1	第4章 まとめ ······ 40

插 図 目 次

第1図 村統遺跡と周辺の遺跡 ······ 2	第12～19図 住居跡出土遺物(1)～(8) ······ 20～27
第2図 村統遺跡と第I次調査区 ······ 3	第20図 土坑・ピット分布図 ······ 31
第3図 遺構配置図 ······ 3	第21図 土坑 ······ 32
第4～11図 住居跡(1)～(8) ······ 12～19	第22～24図 遺構外出土の遺物(1)～(3) ······ 33～35

表 目 次

第1～4表 住居跡出土遺物一覧(1)～(4) ······ 28～30	第8表 土坑一覧 ······ 31
第5表 住居跡出土石器一覧 ······ 30	第9表 ピット一覧 ······ 31
第6表 住居跡出土鉄製品一覧 ······ 30	第10～12表 遺構外出土の遺物一覧(1)～(3) ······ 35～36
第7表 住居跡出土銅製品一覧 ······ 30	

図 版 目 次

図版 1 遺跡全景と1・2・4号住居跡	図版 6 29～32・35～37号住居跡
図版 2 3・5・6・8号住居跡	図版 7 土坑(2・3・6・8・9・12・13・15号)
図版 3 9・11～14号住居跡	図版 8 各時期の住居跡出土遺物
図版 4 17～20・22・23号住居跡	図版 9 住居跡と遺構外出土遺物
図版 5 21・25～28・33・34号住居跡	図版 10 線刻・ヘラ書き・墨書き土器

第1章 遺跡をとりまく環境

1. 遺跡の立地と環境（第1図）

敷島町が所在する甲府盆地の北西部は、奥秩父の金峰山を源とし南流する荒川によって開析された北から南へと緩やかに傾斜した扇状地形を成している。この西側には、北西部にそびえる茅ヶ岳の裾部を形成するなどらかな赤坂台地が貢川と釜無川に挟まれるように南北に張り出して伸びており、JR中央線付近において終息する。一方、北側はこの扇状地形の背後を担うように東西に大きく片山が跨り、さらに東側には千代田湖を挟んで尾根筋を南側へと進むと舌状に張り出した湯村山がある。

このように甲府盆地の北西部は、東西北部の三方が台地と山々によって「コ」字状に取り囲まれ、盆地に向かって南向きに開口し、まるで天然の要害を形成するような特殊な地形を織り成している。

このうち荒川の右岸に位置する敷島町は、町域は南北約17km、東西約4kmと南北に細長い町である。

本町は大きく北部の山間地帯と南部の盆地部におおよそ大別されるが、町域のほぼ8~9割は標高1,704mを測る茅ヶ岳をはじめとする曲岳、太刀岡山などの山岳地帯や一部の丘陵からなっている。

一方、町南部は上述した荒川による扇状地形で、東はちょうど荒川右岸に面し、西は貢川を境として東西を河川で挟まれた南北に細長い格好を呈し、盆地北西部の一部に相当する。

以上のように、甲府盆地北西部は中央に荒川が南流し、東西北部の三方を台地と丘陵により囲まれた空間が形成され、荒川右岸の本町ではこのような地形をもとに様々な歴史的背景が垣間みられる。

2. 周辺遺跡と歴史的背景（第1図）

甲府盆地の北西部では、古墳時代の6世紀中頃から横穴式石室を有する大型の後期古墳が築造されるようになる。中でも、荒川左岸に位置する甲府市湯村の万寿森古墳(4)や県内第2位の石室規模を誇る加牟那塚古墳(5)の存在からこの墳本地域が県内でもかなり大きな勢力拠点となっていたことが窺える。

さらに、6世紀末~7世紀前半には本町南部の周囲を群集墳（千塚・山宮古墳群-甲府市、赤坂台古墳群-双葉・竜王など）が取り巻くようになる（第1図●印）。これまでの調査で、本町における古墳時代後期集落跡を概観すると、松ノ尾遺跡⑥に偏在して住居跡や土坑、掘立柱建物跡などが確認されている。

盆地北西部のこうした勢力の繁栄を背景とし、古墳時代の終わり頃には通称敷島台地の南西に天狗沢瓦窯(61)が操業を開始するようになる。これは県内最古の瓦窯で、7世紀後半（白鳳期）とみられているが、この瓦窯跡で焼かれ、その瓦が供給された古代寺院は残念ながらまだ発見されていない。

奈良・平安時代になると甲斐国は4つの郡に分かれており、当時本町は西に位置する「巨麻郡」に属する。このころ、町の南部において該期の遺構が前代に比べさらに数多く発見されるようになってくる。

これまでに、奈良時代から平安時代初め頃にかけては、まだ発見されている遺構は数少ないが、平安時代中頃~末頃にかけては急激に遺構や遺物の数量も増加する傾向にある。

中でも松ノ尾遺跡⑥では、これまでの調査において住居跡37軒と竪穴式遺構10基が確認され、膨大な量の土器、須恵器、灰釉陶器をはじめとし、陶磁器類、鍛冶関連遺物や鉄・銅製品などのほか、墨書き土器や円面鏡(4個体分の破片)、腰帶（鉄製鉤具2点、銅製蛇尾1点）や金銅製小仏像2軀などが出土している。

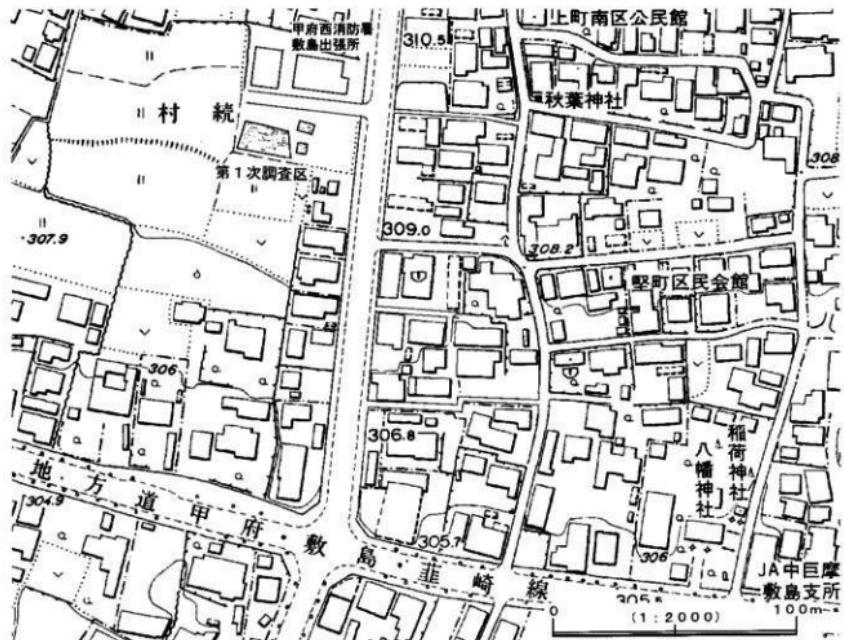
今回報告する村続遺跡①は、荒川によって形成された南北に延びる標高320mの微高地に立地する。

遺跡の東側には荒川が南流し、南には旧「穂坂路」が接している。「穂坂路」は、少なくとも中世には、甲斐と信州を繋ぐ主要道であったとみられているが、古代まで通り得るものであったかは明らかでない。

平安時代の食膳具に注目すると、巨麻郡域の遺跡からは信州から搬入されたとみられる物が県内でも比較的多く出土する傾向が指摘されており、本遺跡も同様に地理的にみても当時信州を縦断する公的官道であった「東山道」から多くの物資や情報が往来してきたことであろう。

第1図 村続遺跡と周辺の遺跡





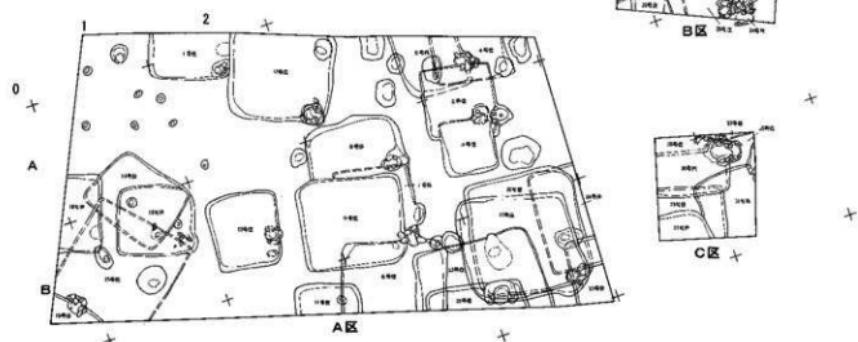
第2図 村統遺跡と第1次調査区 (1:2000)

6 7

5

4 7

3 7



第3図 透構配置図

第2章 遺構と遺物

今回の調査は、調査面積が約320m²において奈良・平安時代の住居跡計36軒が確認された（第3図）。

その分布は、調査区の東側へと向かって住居跡の密度が高くなるようで、しかも比較的8・9世紀代の古い時期のものが東側に偏在している傾向が窺われた。

1. 住居跡と出土遺物（第4~19図、第1~7表、図版1~6・8・9）

1号住居跡（第4・12図、図版1-2）

調査区AのO・A-2グリッドに位置する。

住居跡北側は調査区外にあり、また西側の一部は12号住居跡に切られている。規模は東西約3.3m、確認された南北は約1.9mを測る。壁は緩やかに立ち上がり深さ19cmある。

12号住居跡によって切られた東壁には、50×55cmの範囲で焼土のまとまりが確認され、カマド跡が存在した可能性が考えられる。

また、この焼土跡から住居跡の中央に向かって、硬く踏みしまった床面が広い範囲にわたり展開していた。

また、南東隅部には90×70cmの橢円形を呈する深さ6cmの土坑があり、15~35cm大の石が詰っていた。

遺物は、細片が多く壺0101、0102などがある。

2号住居跡（第4・12図、図版1-4・5）

調査区AのA・B-4グリッドに位置する。

住居跡の北側は4・5号住居跡に、南側は3号住居跡によって切られている。規模は東西約3.0m、南北約3.0mのほぼ正方形を呈する。確認面からの深さは約40cmを測り、外へ直線的に傾きながら立ち上がる。

カマドは、東壁の南側に設けられており、長軸約90cm、短軸約85cmを測る。燃焼部とみられるカマド中央の底部には焼土と炭化物が充満しており、その中央には支柱石とみられる長い石が直立していた。

遺物は、放射状暗文を施した壺0201~0203、渦巻状暗文の皿0204・0205などが出土している。

3号住居跡（第4・12図、図版2-1・2）

調査区AのB-4グリッドに位置する。

2号住居跡と重複し、これを切っている。規模は

東西約2.15m、南北約2.2mとやや小型でほとんど正方形にちかい形態を呈する。確認面からの深さは約40cmを測り、しっかりと掘り込みを有する。

カマドは、北壁の東側隅にあり、長軸約80cm、短軸約65cmを測る。カマド正面の東西には25~30cm大の扁平大型の石がそれぞれ1個づつ直立し、さらにこれら両袖の石で支えられた天井石には二等辺三角形状の大型の石が使われていた。

遺物は、放射状暗文の壺0301・0302、放射状暗文の皿0303、渦巻状暗文の皿0304、削り出し高台壺0305のほか、内面底部に鉄滓が溶着し、外面に油玉の付着した培塿に転用されたとみられる削り出し高台壺0306などが出土している。

4号住居跡（第4・12・19図、図版1-3）

調査区AのA-4グリッドに位置する。

2・5号の2軒の住居跡と重複しており、2号住居跡を切っているが、5号住居跡によって切られている。また、北半部は調査区外となっている。

規模は、5号住居跡によって切られているため東西は判然としないがおよそ3.0mを測るとみられ、南北は確認可能な範囲で約1.8mを測り、方形を呈すると考えられる。確認面からの深さ32cmあり、壁は緩やかに立ち上がっている。

確認された範囲内ではカマド等の施設はみられない。

遺物は、放射状暗文の壺0401・0402、渦巻状暗文の皿0403のほか、須恵器の胴部を再利用した転用窯0404がある。

5号住居跡（第4・12図、図版2-3・4）

調査区AのA-3・4グリッドに位置している。

2・4号住居跡と重複して両住居跡を切っている。また、北側は調査区外となっており不明である。

規模は、確認されたカマドの位置関係から東西約2.7m、南北は確認できる範囲で2.8mある。そし

て、確認面からの深さは 28 cm あり、壁は緩やかに立ち上がる。

カマドは東壁の南寄りにあり、長軸約 105 cm、短軸約 90 cm を測る。15~30 cm 大ほどの石が組み上げられていた。そして、カマド正面の南北の位置には袖石として大型の長い石が直立したまま残存していた。

カマド内には焼土と炭化物が良好に遺存していた。

遺物は、壺 0501・0502、内黒の高台壺 0503、甕 0504などがあり、壺 0502 はカマド内から出土している。

6 号住居跡（第 5・12 図、図版 2-5・6）

調査区 A の B-3、C-2・3 グリッドに位置する。住居跡の南側は調査区外となつており不明である。7・9・11・22・23 号の 5 軒の住居跡と重複し、これらすべてを切っている。

規模は、東西約 4.3 m、南北は確認できる範囲で 2.8 m あり、確認面からの深さは 25~30 cm を測る。

カマドは北壁の東側寄りに位置し、南北約 85 cm、東西約 105 cm ある。正面には 30~40 cm 大の三角形状を呈する大型の石を袖石として設け、奥には 20 cm 大前後の 5 点の石が組まれている。さらに、2 個の壺が互いの口縁部を組み合わせるように、意図的にカマドの焚き口部に近いところに置かれていた（図版 2-6）。

床面はほとんど水平で、カマドの正面から住居跡中央、さらに南へと向かって硬く踏みしまった面が展開していた。

遺物は、壺 0601~0605、皿 0606 などが出でている。

7 号住居跡（第 5・12 図）

調査区 A の B-3 グリッドに位置する。6・8・9 号住居跡と重複関係にあり、8 号住居跡を切り、6・9 号住居跡に切られている。

本住居跡は、2 軒の住居跡にほぼ切られており、詳細は明らかでないが、カマドの位置などから一辺約 3.0 m を測り、正方形を呈するとみられる。確認面からの深さは約 30 cm ある。

カマドは東壁の南側にあり、東西約 50 cm、南北約 85 cm を測る。中央に焼土と炭化物が認められた。

遺物は、壺 0701、灰釉陶器 0702、甕 0703 があり、甕 0703 はカマド内から出土している。

8 号住居跡（第 5・13・19 図、図版 2-7・8）

調査区 A の A-3、B-2・3 グリッドに位置する。本住居跡の南側半分は 7・9 号住居跡によって大きく切られてしまっている。

規模は、東西約 3.9 m、南北は状態の良好的部分で約 2.4 m が残存している。確認面からの深さは約 45 cm を測り、壁は外へ向かいほぼ直線的に立ち上がる。

カマドは東壁にあり、長軸約 1.2 m、短軸約 1.1 m を測る。7 号住居跡によって南側半部が削平されてしまっているが、北側の袖部では粘土が使用され、袖石も良好に遺存していた。住居跡の東西の規模から考えて、東壁のほぼ中央に本来は設けられていたと思われる。

遺物は、放射状暗文の壺 0801~0803、放射状暗文の皿 0804、砥石 0805、転用硯 0806~0808 などがある。

9 号住居跡（第 5・13・19 図、図版 3-1）

調査区 A の B・C-2・3 グリッドに位置する。3 軒の住居跡と重複関係にあり、7・8 号住居跡を切り、6 号住居跡により切られている。

規模は、東西約 4.2 m、南北約 3.7 m の長方形を呈し、確認面からの深さ 50~57 cm を測る。

とくに、カマド等の施設はみられなかったが、南東隅付近では直径約 25 cm の焼土のまとまりが観察された。このため、6 号住居跡によってカマドが破壊されてしまっている可能性も考えられる。

遺物は、壺 0901~0905、甕 0906、須恵器 0907、灰釉陶器 0908、砥石 0909、転用硯 0910 などが出土している。

11 号住居跡（第 5・13 図、図版 3-2）

調査区 A の C-2・3 グリッドに位置する。住居跡の東側を 6 号住居跡によって切られ、南側半分は調査区外となっている。

規模は、東西約 2.7 m、確認可能な南北は約 1.25 m で、方形を呈している。確認面からの深さは 28 cm を測り、壁は緩やかに立ち上がっている。

東側の床面には直径約 35 cm、深さ約 20 cm のビットがあり、底面には 20×10 cm 大の石が置かれていた。

遺物は数少なく、壺 1101 のみ掲載した。

12号住居跡（第6・13図、図版3-3・4）

調査区AのA-2・3グリッドに位置する。

西側にある1号住居跡をわずかに切っている。規模は、東西約4.2mあり、北側は調査区外となっているが、北東部の壁がコーナーを描きつつあることから南北約3.8mを測るとみられ、長方形を呈すると考えられる。確認面からの深さは約35cmを測り、壁は緩やかに立ち上がっている。

カマドは南東隅部にあり、長軸約100cm、短軸約90cmで、内部は焼土と炭化物、灰が充満していた。

床面は、中央に向かってわずかに緩やかな擂鉢状となるが、住居跡の中央を中心で硬く踏みしまった面が広く展開する。そして、カマドから住居跡の中央に向かって人頭大ほどの石が散在していた。

遺物は、脚高高台坏1201～1203、坏1204・1205、小皿1206～1211、小碗1212、白磁1213、鉢1214、羽釜1215、錘1216などの土器質土器が中心に出土し、11世紀中葉～後半の一括資料として捉えられる。

なお、本住居跡から出土した遺物には8世紀代のものから平安時代後半(11世紀代)までのものが含まれている。白磁1213については、上記の時期決定となった一括資料に比べてわずかに古い時期のものとみられるが、これについては後述する。

13号住居跡（第7・14・19図、図版3-5・6）

調査区AのB-2グリッドに位置する。

重複関係は認められない。

規模は、東西約2.7m、南北約3.1mを測り、方形を呈する。確認面からの深さは約5cmから深いところで約20cmあり、壁は緩やかに立ち上がっている。

カマドは、長軸約75cm、短軸約70cmを測り、方形を呈し、南・北・東側は20～40cm大の石できれいに「コ」字状に構築されていた。

遺物は、坏1301～1303、皿1304・1305、内黒の高台坏1306・1307、灰釉陶器碗の底部を利用した転用碗1308のほか、甕1309・1310などがある。

14号住居跡（第7・14図、図版3-7・8）

調査区AのA・B-1グリッドに位置する。

3軒の住居跡と重複関係にあり、その内16・18号住居跡を切り、15号住居跡には切られている。

規模は、東西約2.8m、南北約3.65mの長方形を呈し、確認面からの深さはわずかに8cmと浅い。

住居跡南東側には直径約45cmの焼土跡が確認され、カマドが存在した可能性も考えられるが、15号住居跡によって削平されてしまっていると思われる。

遺物は、住居跡北部コーナー付近を中心に小皿1401、柱状高台の小皿1402、耳皿1405、土製の鍤1408のほか、銅製小仏像の台座1409などが出土している。

また、南壁の中央付近には小碗1404や土器片製品1406がある。

15号住居跡（第7・14図）

調査区AのA-1、B-0・1グリッドに位置する。

本住居跡は、遺構確認の段階で南壁が判明し、16号住居跡との切り合い調査では北壁の一部を確認した。

一方、この一帯で5軒が重なり合った状況から、当初東・西壁は判然としなかった。しかし、重複する18号住居跡のカマド南半部が袖石ごと削平されていることや14・16号住居跡から検出された焼土は本来カマドが存在した痕跡と推測され、本住居跡の重複によって破壊されたと考えられることから、ちょうど図化した推測線付近に東壁が存在したと考えられる。

西壁は明らかでなく、19号住居跡に切られてしまっているのかどうかは明らかでない。

規模は遺存する北・南壁の状態から南北約4.35mを測り、本住居跡は本来一辺約4.3m前後の方形であったと思われる。

床面はほぼ水平で、南部コーナー付近から住居跡の中央へと向かって硬く踏みしまった面が展開していた。

遺物は、住居跡の主に南半部から多く出土しており、小皿1501～1504、柱状高台の小皿1505、台付坏1506～1509、柱状高台坏1510・1511、土器片製品1512、砥石1513などがみられる。

16号住居跡（第7・15図）

調査区AのA・B-0・1グリッドに位置する。

14・15号住居跡に切られ、西側は調査区外となる。

規模は、南北約3.15m、東西は確認可能な範囲で1.75mを測り、形態は方形を呈するとみられる。確認面からの深さは約15cmで、壁は緩やか

に立ち上がる。

東壁の南側には、14号住居跡と同様に焼土の溜りが確認され、本来その位置関係から推測するとカマドが存在した可能性が考えられる。

遺物は、小皿1601、脚高高台小皿1602、小碗1603などが出土している。

17号住居跡（第8・15・19図、図版4-1・2）

調査区AのB・C-3・4グリッドに位置する。

計5軒の住居跡と複雑に重複し合っており、20～24号住居跡を切っている。

規模は、東西約4.7m、南北約4.25mの方形を呈し、確認面からの深さは約30cmを測る。

カマドは、住居跡の南東隅部に設けられていたようであるが、長軸65cm、短軸50cmの焼土を多分に含んだ楕円形の掘り込みが確認できるだけで、その周辺には35～40cm大の大型扁平石などが伴う。

また、カマドの周辺から住居跡の中央に向かって拳大から人頭大ほどの大きさの石が散在し広がっている。

床面は、多少の凹凸がみられるが総体的にはほぼ水平を保っており、カマドの正面から住居跡の中央に向かって硬く踏みしまった面が広く展開していた。

遺物は、脚高高台坏1701、皿1702、大型の坏1703、灰釉陶器の碗1704、灰釉陶器の壺1705、羽釜1706、砥石1707、転用硯1708・1709などがある。このうち、脚高高台坏1703と羽釜1706はカマド内から出土している。

18号住居跡（第8・15図、図版4-3・4）

調査区AのA・B-1グリッドに位置している。

本住居跡は、14・15号の2軒の住居跡によって切られていたが、その割りには遺存状況は比較的良好で住居跡の全体像を捉えることが可能であった。

規模は、東西約3.2m、南北約2.9mを測り、方形を呈する。確認面からの深さは、良好な場所で約20cmあり、14・15号住居跡により切られた部分では約10cmを測り、全体的に壁は緩やかに立ち上がる。

住居跡の南東部にカマドが設けられ、規模は長軸約105cm、短軸約60cmを測り、焚き口から燃焼部にあたる掘り込みには焼土と炭化物が充満していた。そして、カマドの北東半部は20～30cm大の5つの石を組んで袖部が設けられており、南東

半部については15号住居跡により大きく削平され、袖部は確認できなかった。

遺物は、坏1801～1803、皿1804～1808、内黒高台坏1809・1810、小型の壺1811、壺1812などがあり、器種と量とともに充実している。

19号住居跡（第7・15図、図版4-5）

調査区Aの南西部角O-Bグリッドに位置する。

住居跡の大部分は調査区外にあり、そのため大きさは不明である。また、北東部に隣接する15号住居跡は西壁が判然としなかったため、本住居跡と重複しているかは明らかでない。もし、重複関係にあつたとしても、本住居跡のカマドが破壊されることなく検出されたことから、時期的な前後関係としては本住居跡が15号住居跡に比べ新しい時期に所属することとなる。

カマドは北東壁に設けられており、長軸約85cm、短軸75cmある。正面には約40×30×13cm大の扁平で大型の石を利用して両袖部を造り出し、さらに奥側にはおよそ30×25×15cm大の石を数多く組み上げることでカマドが構築されていた。

遺物は、土師質土器を中心とする小皿1901・1902、坏1903～1905、台付坏ないしは柱状高台坏の範疇に属する1906～1908などが出土している。

20号住居跡（第8・16・19図、図版4-6）

調査区AのB・C-4グリッドに位置する。

本住居跡は5軒の住居跡と重複関係にあり、17・21～24号住居跡によって切られ、とくに南半部は破壊されており、南壁の一部がわずかに残存している。

規模は、東西約4.6m、南北約4.95mと大型で方形を呈する。もっとも良好な確認面からの深さは約40cmを測り、壁は外に向かって直線的に立ち上がっている。

東壁際のやや南寄りには長軸約115cm、短軸約80cm、床面からの深さ約12cmで、焼土を多分に含んだ掘り込みが確認された。おそらく、上部に重なる17号住居跡により壊されてしまった東カマドの残骸である可能性が高い。

遺物は、放射状暗文の坏2001・2002、壺2003、須恵器壺2004、転用硯2005などがあり、坏2001はカマド内から出土している。

21号住居跡（第9・16図、図版5-1）

調査区Aの南東隅部C-4グリッドに位置する。

3軒の住居跡と重複関係にあり、20号住居跡を切り、17・24号住居跡に切られている。また、本住居跡は大半が調査区外となっており、北西コーナーを中心に北・西壁の一部を確認することができた。

確認可能な規模は、東西約1.45m、南北約2.8mであったが、他の住居跡と同様に方形を呈する住居跡と考えられる。確認面からの深さは約35cmあり、壁は外に向かって直線的に立ち上げる。

発見された範囲内の中央からやや南寄りには、長軸約90cm、短軸約60cmの巨石が出土した。

この大型の石は平らな面がほぼ水平で上向きとなり床面から上方に約20cmだけその姿を現し出土したが、床面から下部は三角形状を呈し下方へ約30~40cmほど埋没した状態となっている。

遺物は、内黒の壺2101、皿2102・2103、須恵器甕2104などがあるが、このうち皿2102は大型の石の上面に密着して、土圧で潰れていた。

22号住居跡（第9・16図、図版4-7・8）

調査区AのC-3・4グリッドに位置する。

4軒の住居跡と重複関係にあり、20・23号住居跡を切り、6・17号住居跡に切られている。南側のはほとんどが調査区外となっている。

規模は、東西約4.0m、南北は確認できる範囲で約1.1mを測り、おそらく一辺約4.0mの方形を呈する住居跡とみられる。

調査状況から本来の深さは約60~70cmあり、かなりしっかりと深い掘り込みをもっていた。

北壁の東側にはカマドが設けられており、南北約100cm、東西約130cmを測る。両袖には用材としてそれぞれ1個づつ扁平で大型の石が袖石として使用され、さらにその周りには白色粘土などを混ぜた土でカマドの袖を構築していた。また、カマド内の焚き口から燃焼部にあたる範囲内で焼土と炭化物が充満していた。

遺物は、皿2201・2202、内面に暗文を施した内黒の壺2203、甕2204などが出土している。

23号住居跡（第9・16図、図版4-7）

調査区AのC-3・4グリッドに位置する。

4軒の住居跡と重複関係にあり、20号住居跡を切るが、6・17・22号住居跡によって切られている。

規模は、東西約5.2m、南側は調査区外となっており、確認できた範囲で南北約3.4mを測る。

確認面からの深さは約30cmを測り、壁は外に向かって直線的に立ち上げている。

北壁の東側には、長軸150cm、短軸約100cmほどの楕円形状に焼土と炭化物が散在しまった部分があり、その中央には50×35cm大の良好な火床範囲が検出された。おそらく、17号住居跡によって焼された本住居跡のカマド跡ではなかったかと考えられる。

遺物は、内黒の壺2301・2302、鉢2303、甕2304・2305、甕2306などのほか細片の土器が多く出土している。

24号住居跡（第9・16図）

調査区AのB・C-4グリッドに位置する。

3軒の住居跡と重複関係にあり、20・21号住居跡を切り、17号住居跡によって切られている。また、東側半部は調査区外となっている。

幸いにも、北・南壁の一部を発見することができ、C-4グリッドの東面で本住居跡のセクションを確認することができたため、規模が南北約4.25mを測ることが明らかとなった。東西の範囲は17号住居跡に切られていたことや20号住居跡の覆土中で確認することが困難であったため、不明である。おそらく、本住居跡は一辺約4.0mの方形を呈していると推測される。

調査範囲では、硬く踏みしまった良好な床面が検出され、17号住居跡が存在する範囲内では重複のために硬い床面は切られ、続きはみられなかった。

遺物は、内黒の壺2401・2402、甕2403などがあり、ほとんどの範囲で出土した遺物は細片であった。

25号住居跡（第9・17・19図、図版5-2~4）

調査区BのA-5・6グリッドに位置している。

4軒の住居跡と重複関係にあり、26~28・33号住居跡を切っている。北・西側は調査区外となっている。

調査した範囲内の東・南壁については他の住居跡の覆土中に掘り込まれていたことから、確認が容易でなく不明である。しかし、カマドの位置関係と住居跡中央に向かって西側へと展開する硬く踏み締まった床面の存在から、調査範囲における規模は、

およそ東西約3.5m、南北約2.7mを測ると推測される。

カマドは、住居跡の南東に設けられた東カマドであったと考えられる。長軸約90cm、短軸約90cmあり、扁平で大型の石を直立させて両袖の芯に使用し、さらに20~30cm大の石を組み上げ白色粘土を含んだ土で袖部が構築されていた。カマド内の奥には焼土と炭化物が充満しており、カマドの周辺にも焼土や白色粘土が散在していた。

硬く締まった範囲の南東寄りの床面直上からフイゴの羽口2507が出土した(図版5-4)。そして、この羽口の近辺からは赤化し長方形状に加工されたようなレンガ状の石や扁平な台石状のものが床面の直上から出ている。この35×25×10cm大の扁平な台石表面中央には、何かの圧力で弾けた箇所が観察された。

遺物は、坏2501・2502、皿2503、甕2504、羽釜2505、灰釉陶器の甕2506、フイゴの羽口2507、鉄鎌2508、鉄斧2509、ヤリガンナ2510、不明銅製品2511などが出土している。

このうち、遺物2501~2506の土器類はすべてカマド内から出土したものを掲載した。

また、カマド北側には45×25cm大の白色粘土の塊があり、その周囲から鉄鎌2508と不明銅製品2511が、鉄斧2509は調査区Bの北西隅部の床面上から出土している。

さらに、カマド内中央には焼土が検出され、その上面から鉄滓(碗形滓か?)が出土したが、これだけに限らず、本住居跡内と周辺からも鉄滓が出ていている。

今回調査を行った調査区(A~C)全体からみても鉄製品や鉄滓、羽口の出土などが、この辺りで偏在してみられることから本住居跡ないしは調査区Bの周辺に鍛冶関連の遺構が存在する可能性も考えられる。

26号住居跡(第10・16・19図、図版5-5・6)

調査区BのA・B-5・6グリッドに位置する。

5軒の住居跡と重複関係にあり、このうち、27・28・33・34号住居跡を切り、25号住居跡に切らされている。

南半部は、調査区外となつており不明である。

東半部は他の住居跡と重複が激しく明確に壁を確認できなかつたが、カマドの位置関係から東西約

4.0mを測るとみられ、調査可能な範囲内での南北は約2.35mの規模を有する。確認面からの深さは約30cmである。

床面は、ほぼ水平で東カマドの正面から住居跡中央に向かって硬く踏み締められた面が良好に認められた。

カマドは遺存状態がかなり良好で東壁に設けられ、東西80×南北85cmの大きさがある。両袖には30×30×15cmから30×30×35cm大の大型の石を直立させ、さらに15~30cm大の石を多数組み上げ、カマドの芯を構築していた(図版5-6)。また、カマド奥の煙道部とみられる箇所には25~30cm大の扁平な石を並列して天井部を造り出していた。カマド中央には焼土と炭化物が充満しており、そしてカマド正面の床面上にはところどころ灰が薄く層状をなして堆積していた。

遺物は、坏2601・2602、羽釜2603などがあり、2601と2603はカマド内から発見され、2602はカマド正面の床面上から土圧により潰れた状態で出土した。

27号住居跡(第10・17図、図版5-7・8)

調査区BのA・B-6グリッドに位置する。

4軒の住居跡と重複関係にあり、28号住居跡を切り、25・26・34号住居跡によって切られている。

とくに、本住居跡は26・34号住居跡と重複がかなり激しいことから、明確に調査できたのは東壁とこれに付設されたカマド跡だけであったが、他の住居跡との切り合い関係から勘案し、掲載した一辺約2.8mほどの方形を呈する住居跡であったと考えられる。

カマドは、80×75cmを測る東カマドであり、カマド袖部のあたりに約20~30cm大の石がまとまって出土したが、34号住居跡の構築で壊されてしまっている。

遺物は、見込み部から内面体部にかけて放射状暗文が施された坏2701、須恵器高台坏2702があり、2702の一部破片はカマド内から出土している。

28号住居跡(第10・17図、図版5-5・7)

調査区BのA-6・7グリッドに位置する。

4軒の住居跡と重複関係にあり、25~27・34号住居跡に切られている。住居跡の北東部はその大半が調査区外となつており、全体像は明らかでない。

確認できた範囲内での規模は、東西約 4.1 m、南北約 2.2 m あり、確認面からの深さ約 50 cm、25 号住居跡床面レベルからの深さは約 40 cm を測り、かなりしっかりとした掘り込みをもつ造構であった。

床面は多少の凹凸はあるがほぼ水平を保っており、調査範囲内では 30×25~70×35 cm 大の台石状の扁平な石が床直上に据えられていた。

また、壁に沿って幅 20~25 cm、深さ約 10 cm ほどの壁溝が全周しながらみつかっている。

遺物は、外面横磨きで内面放射状暗文のある坏 2801、盤状の坏? 2802、須恵器蓋 2803、須恵器高台坏 2804、砥石 2805・2806 などが出土している。

29 号住居跡（第 10・17 図、図版 6-1）

調査区 C の C-5・6 グリッドに位置している。

3 軒の住居跡と重複関係にあり、31・32 号住居跡を切り、30 号住居跡に切られている。西と南側は調査区外となり不明である。

調査した範囲内では確認時の平面プランと調査区 C の南側セクションの観察で東壁を確認できたが、北壁については 30 号住居跡に切られ明らかでない。

調査区 C 内での規模は、東西約 2.7 m、南北約 1.9 m であった。

床面は硬く踏み締まった面が南西側に偏在して確認できており、その床面上には 60×40×15 cm ほどの大型で扁平な台石状のものが置かれていた。

遺物は細片のもののが多かったが、大型の坏 2901 や内黒の坏 2902 などが出土している。

30 号住居跡（第 10・18 図、図版 6-1・2）

調査区 C の C-5・6 グリッドに位置する。

5 軒の住居跡と重複関係があり、29・31・35・37 号住居跡を切り、36 号住居跡によって切られている。

北と西側については調査区外となり、不明である。

調査範囲内での規模は、東西約 3.0 m、南北約 2.5 m を測り、確認面からの深さは約 35 cm ある。

カマドは東壁に位置し、東西約 1.3 m、南北約 1.1 m ある。カマド袖部は約 20 cm 大の石を複数に積み上げて構築されていることが窺えた。また、カマド内の焚き口から燃焼部、そして煙道部にかけて全

体的に焼土と炭化物が充满していた。

床面はほぼ水平で、中央の床面上から 20~30 cm 大の石がまとまって出土している。

遺物は、坏 3001・3002、土師器の高台坏 3003 などがあり、3003 はカマド内から出土している。

31 号住居跡（第 11・18 図、図版 6-3~5）

調査区 C の C-5・6 グリッドに位置している。

4 軒の住居跡と重複関係にあり、35 号住居跡を切り、29・30・32 号住居跡に切られている。また、東と南側は調査区外となっており、詳細は明らかでない。

調査区内的規模は、東西約 2.6 m、南北約 2.9 m を測る。確認面からの深さは約 50 cm あり、調査区 C の東面セクションの観察で本来深さが約 60 cm あったとみられ、しっかりとした掘り込みをもつ住居跡であった。

カマドは北壁にあり、今回その半分をちょうど主軸線上に調査することができ、南北約 130 cm、東西約 35 cm の範囲を完掘することができた。なお、調査区 C の東面セクション観察では炭化物を多分に含む焼土層が焚き口から燃焼部を経て、煙道へと向かって良好に堆積しており、しかも重複する 35 号住居跡を切りながら焼土層が抜けていく状態がよく観察された（図版 6-5）。

さらに、カマドの上部には 30 cm 大以上の扁平大型の石が天井石として設置されていたことも確認できた。

袖部は長軸 30 cm 大ほどの扁平石を直立させ 2 枚並列し袖の芯を造り出していた。

カマドの正面から住居跡中央に向かっては、15~50 cm 大の数多くの石が出土している。おそらく、図版 6-4 にみるように北のカマドから南西側の床面に向かって大きく崩壊しており、元々カマドの構築材として使用されていたものが住居跡の廃絶に伴い大きく崩れた状態ではないかと考えられる。

床面は、水平をほぼ保っており、カマドの正面から住居内の広い範囲にわたって硬く踏み締めた面が展開していた。

遺物は、見込み部から内面体部にかけて放射状暗文を施す坏 3101、渦巻文と区画を暗文で施した内黒の坏 3102、放射状暗文の皿 3203、渦巻状暗文の皿 3204・3205 などが出土している。

32号住居跡（第11・18・19図、図版6-6）

調査区CのC-5グリッドに位置している。

2軒の住居跡と重複関係にあり、31号住居跡を切り、29号住居跡が上部に重なっている。また、西と南側は調査区外である。

確認できた規模は、東西約2.1m、南北約1.2mで隅丸方形状を呈するとみられる。また、29号住居跡の床面からの深さは約25cmを測り、壁は緩やかに立ち上がっている。

遺物は、壺3201、皿3202などが出土している。

33号住居跡（第11・18図、図版5-7）

調査区BのA-5・6グリッドに位置している。

2軒の住居跡と重複関係にあり、26・34号住居跡により切られている。住居跡の大半は調査区外となっている。

確認できた規模は、東西約2.0m、南北約1.2mで、ちょうど住居跡の北東コーナー周辺にあたる。

掘り込みの深さは、26号住居跡の床面から約20cmあり、地山の礫層を掘り上げて構築されていた。

遺物は、壺3301・3302、須恵器壺3303、須恵器高台壺3304などがある。

34号住居跡（第11・18図、図版5-7）

調査区BのA・B-6グリッドに位置する。

5軒の住居跡と重複関係にあり、27・28・33号住居跡を切り、25・26号住居跡に切られている。

本住居跡も27号住居跡と同様に重複が激しく、住居跡の全体像を把握する上で困難を極めた。そのため、重複関係にある住居跡と周囲の地山の残存状況から勘案して、図面上破線でもって復元を試みている。

カマドは、東側に位置しており、27号住居跡のカマドを一部切って、26号住居跡のカマド南東側下部から発見された。規模は、東西85cm、南北は確認可能な場所で約60cmを測る。カマド内は炭化物や焼土が多分に充満していた。また、北側の袖部は26号住居跡の影響で若干壊れていたが、南の袖部は2個の大型の扁平石を東西に並べてあった。

遺物は、壺3401・3402、内黒の高台壺3403、壺3404、羽釜3405などがあり、壺3404はカマド内から出土している。

35号住居跡（第11・18図、図版6-7）

調査区CのC-6グリッドに位置する。

確認できたのは、およそ1.2×1.2m四方のわずかな床面のみの範囲であり、東側は調査区外で、南は31号、西は30号、北は37号住居跡によって切られており、ほとんどが削平を受けていた。

しかし、床面は南側にかけて硬く踏みしまった良好な面が幸いにも残っていた。

調査時には約30cmほどの覆土が堆積していたが、出土した遺物は、須恵器高台壺3501と灰釉陶器の壺3502の2点のみであった。

36号住居跡（第11・18図、図版6-7・8）

調査区CのB・C-5・6グリッドに位置している。30・37号の2軒の住居跡を切っている。

北と西側は調査区外で明らかでなく、南側は30号住居跡の床面上から出土した石のまとまりとの関係から、圓化した辺りで南壁が巡っていたと考えられる。

カマドは調査区Cの北面でその南半分が確認された。東西約90cmで南北は確認できた範囲で約30cmを測る。最初石が集中して出土したことから、ただの石溜りかと思われたが、1点1点丁寧に取り除いていった結果、天井石と袖石が組み合わされたまま斜めに崩れている状態が確認された。また、カマドが位置する調査区Cの北面際からは焼土と炭化物が検出され、取り除いた多数の石と併に羽釜3602が出土した。

遺物は、カマド内から壺3601と羽釜3602が出土している。

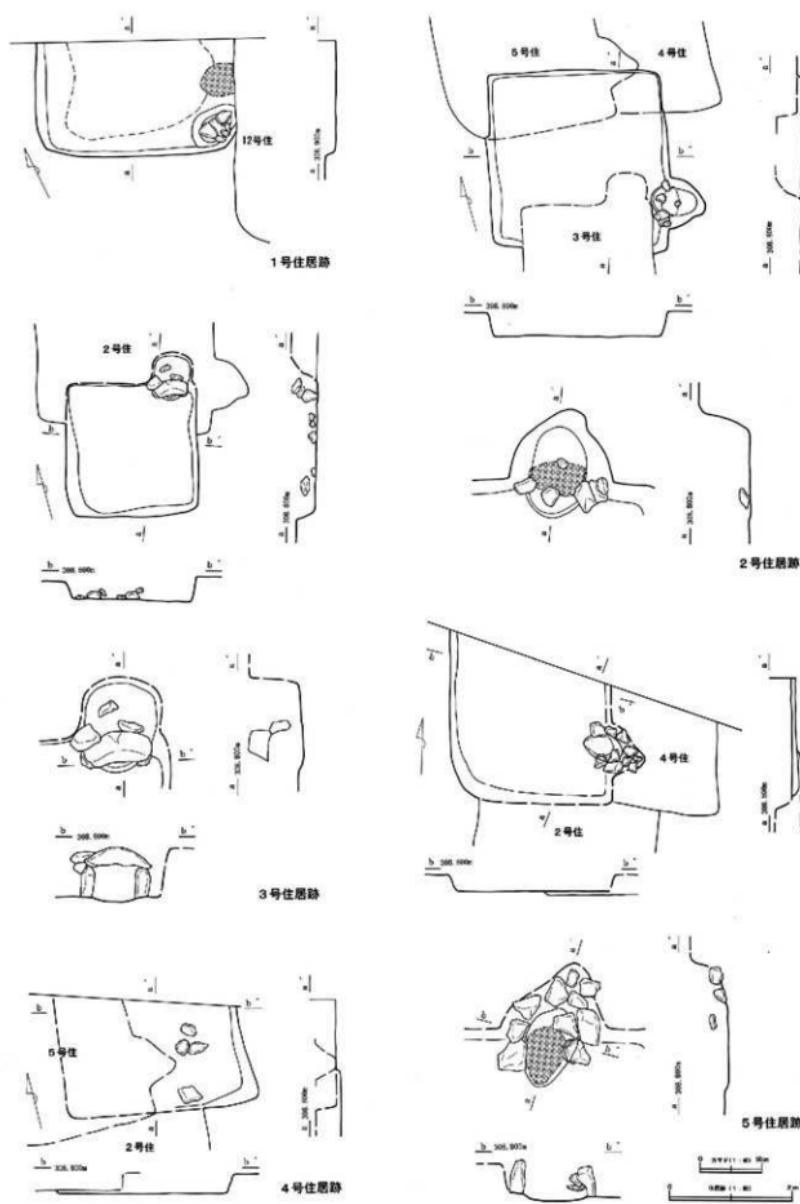
37号住居跡（第11図、図版6-7）

調査区CのC-6グリッドに位置している。

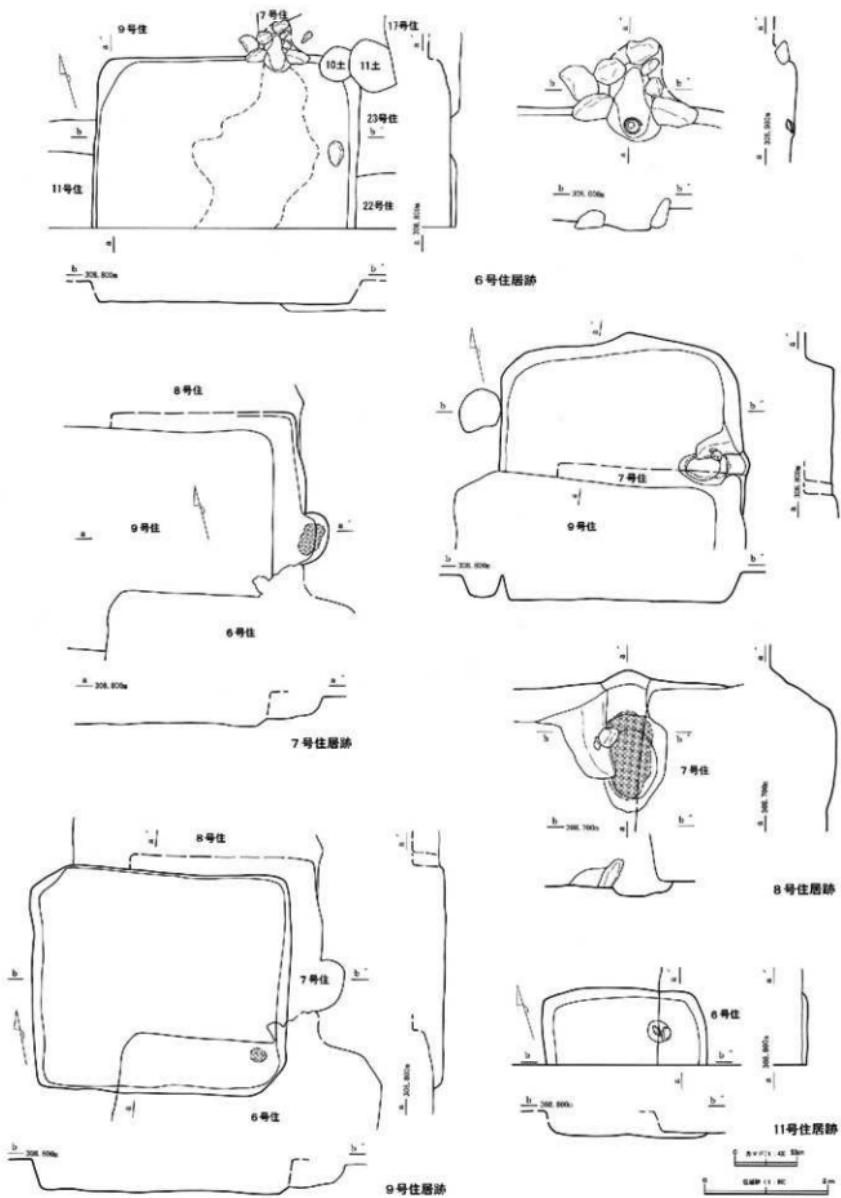
3軒の住居跡と重複関係にあり、35号住居跡を切り、30・36号住居跡に切られている。

また、30号住居跡との前後関係については、本住居跡と重複した位置と範囲からみて30号住居跡のカマドにはとくに削平を受けた状態はみられなかったことから、本住居跡のほうが古い時期であると考えられる。

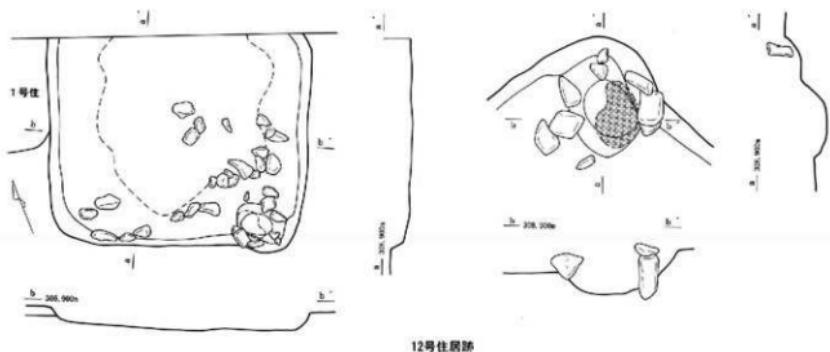
遺物は、今回とくに出土していない。



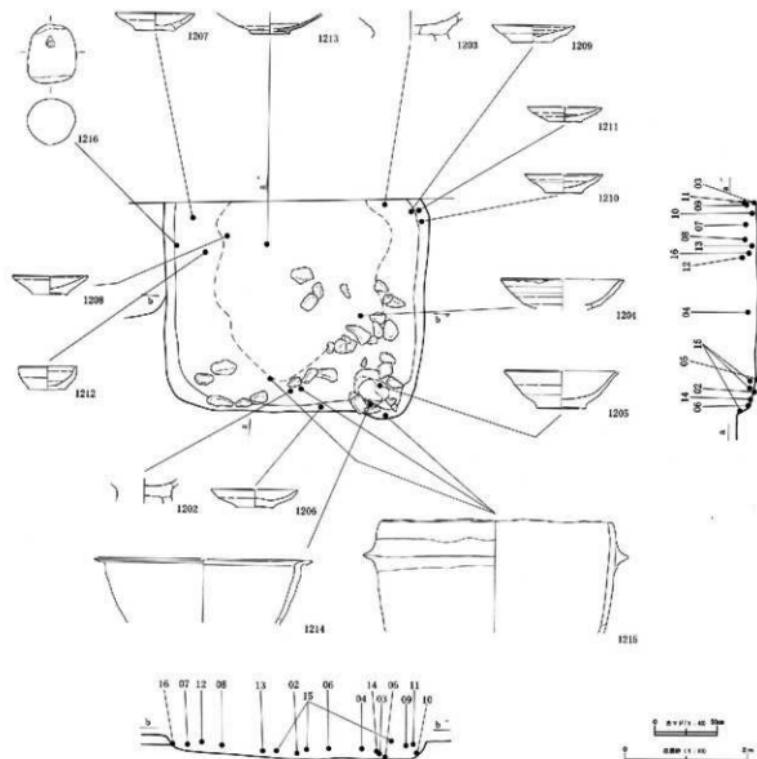
第4図 住居跡(1)



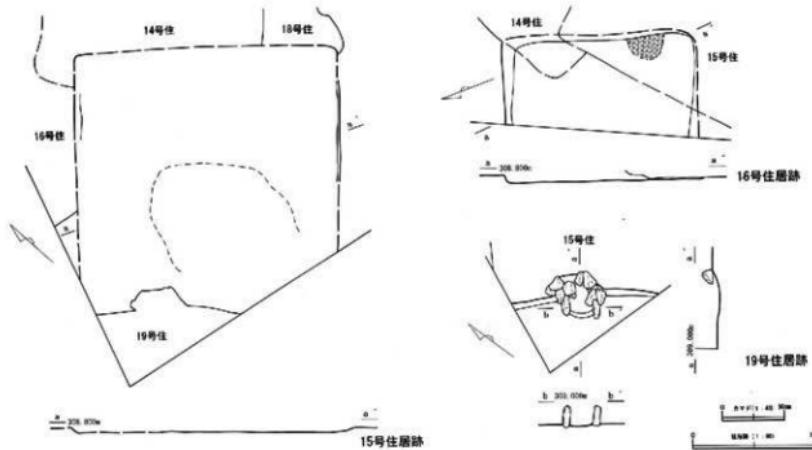
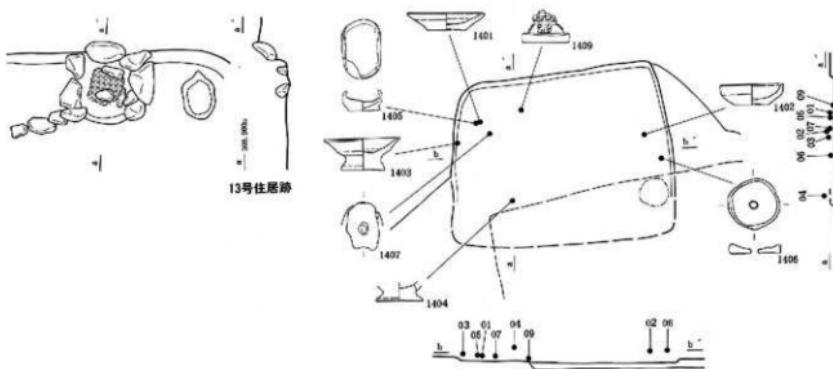
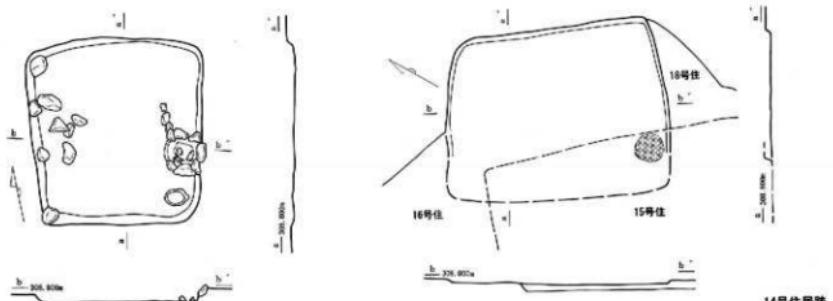
第5図 住居跡 (2)



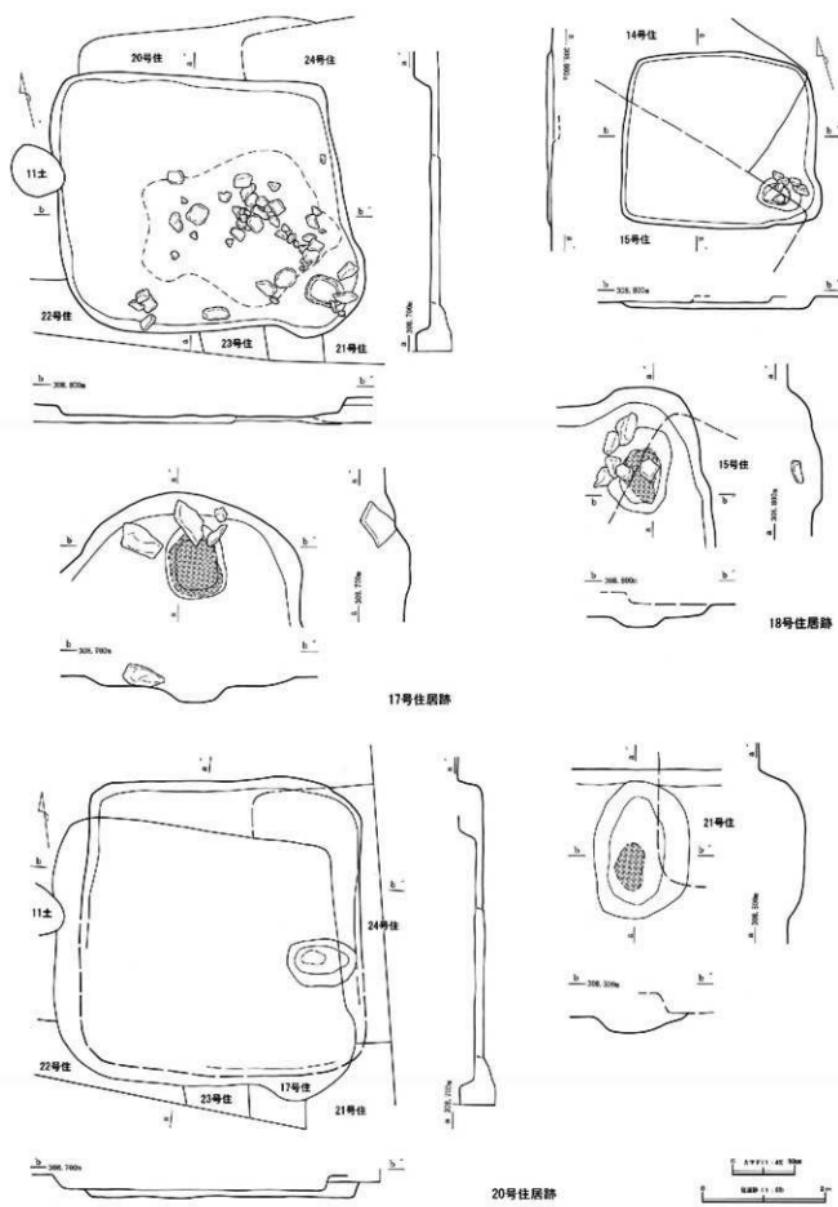
12号住居跡



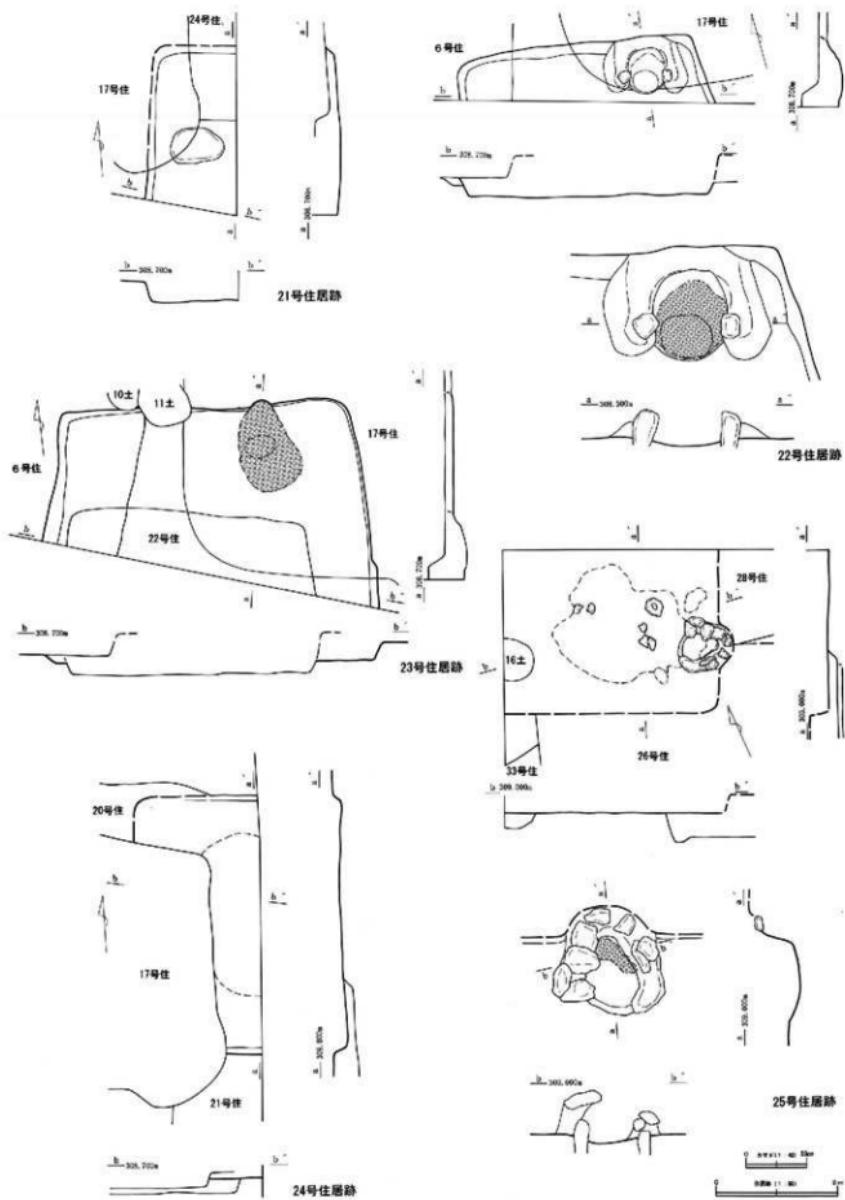
第6図 住居跡 (3)



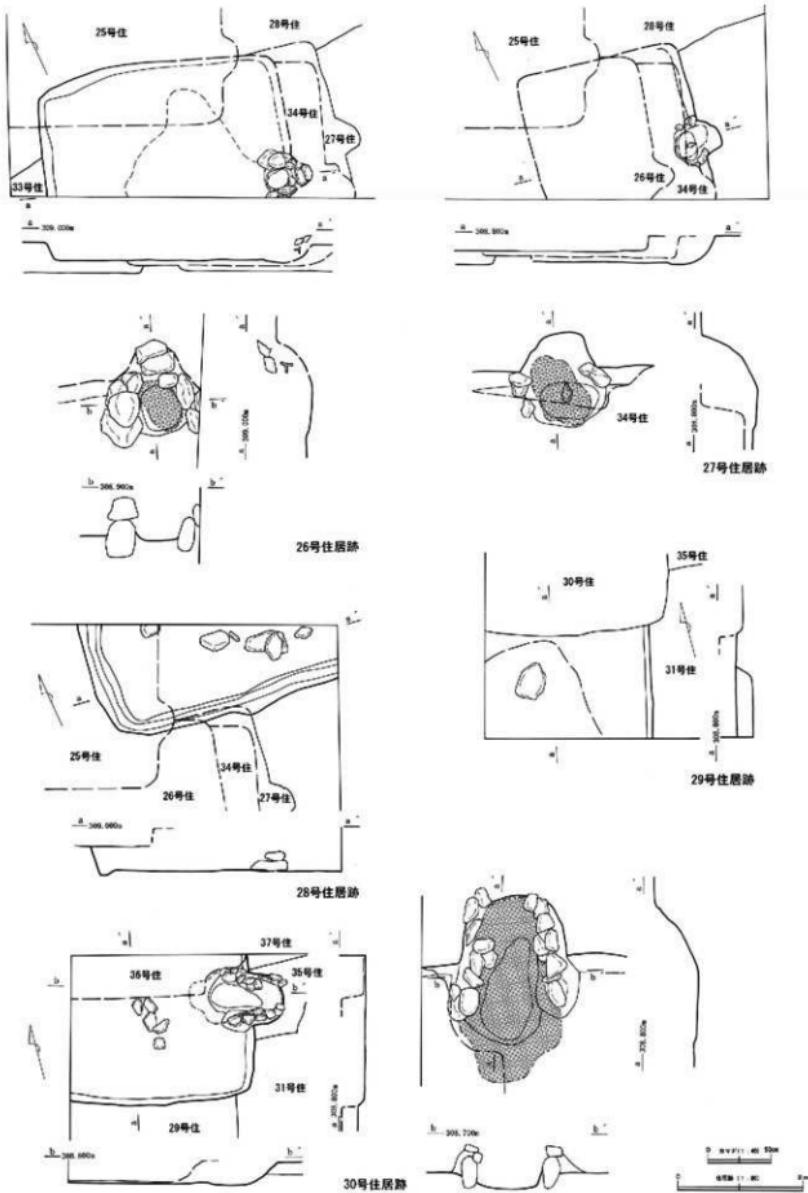
第7図 住居跡(4)



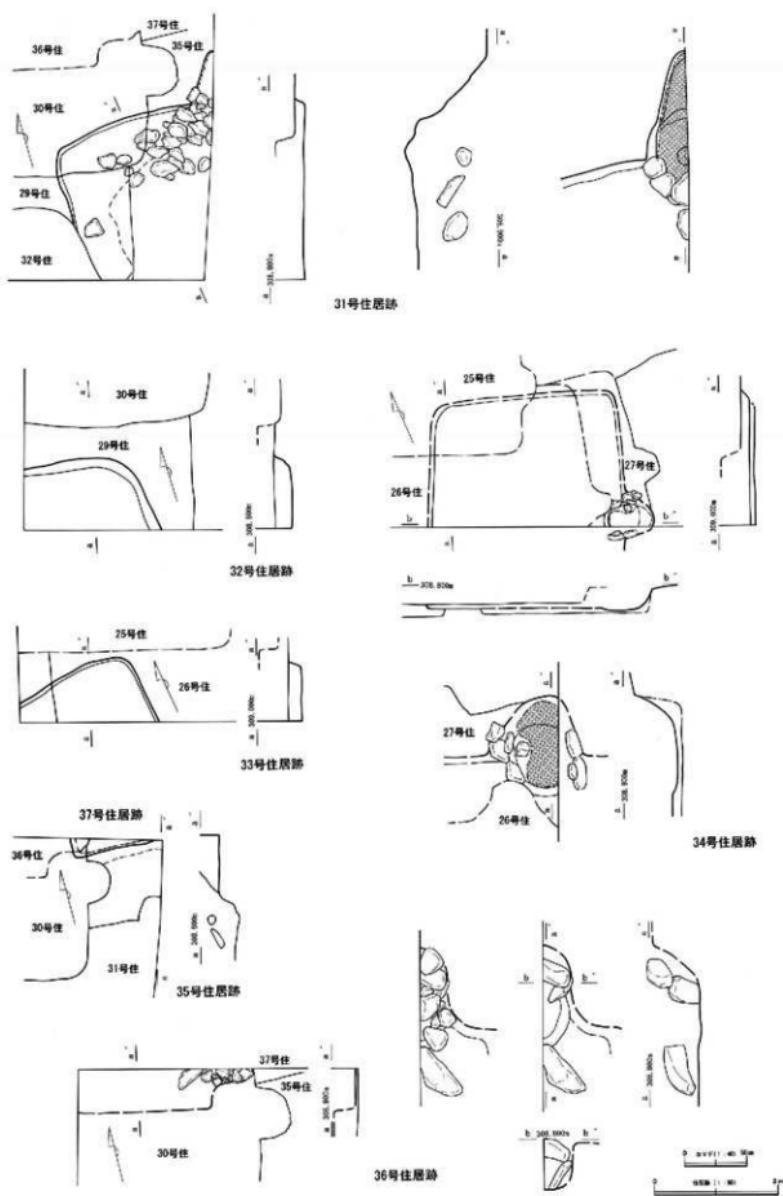
第8図 住居跡 (5)



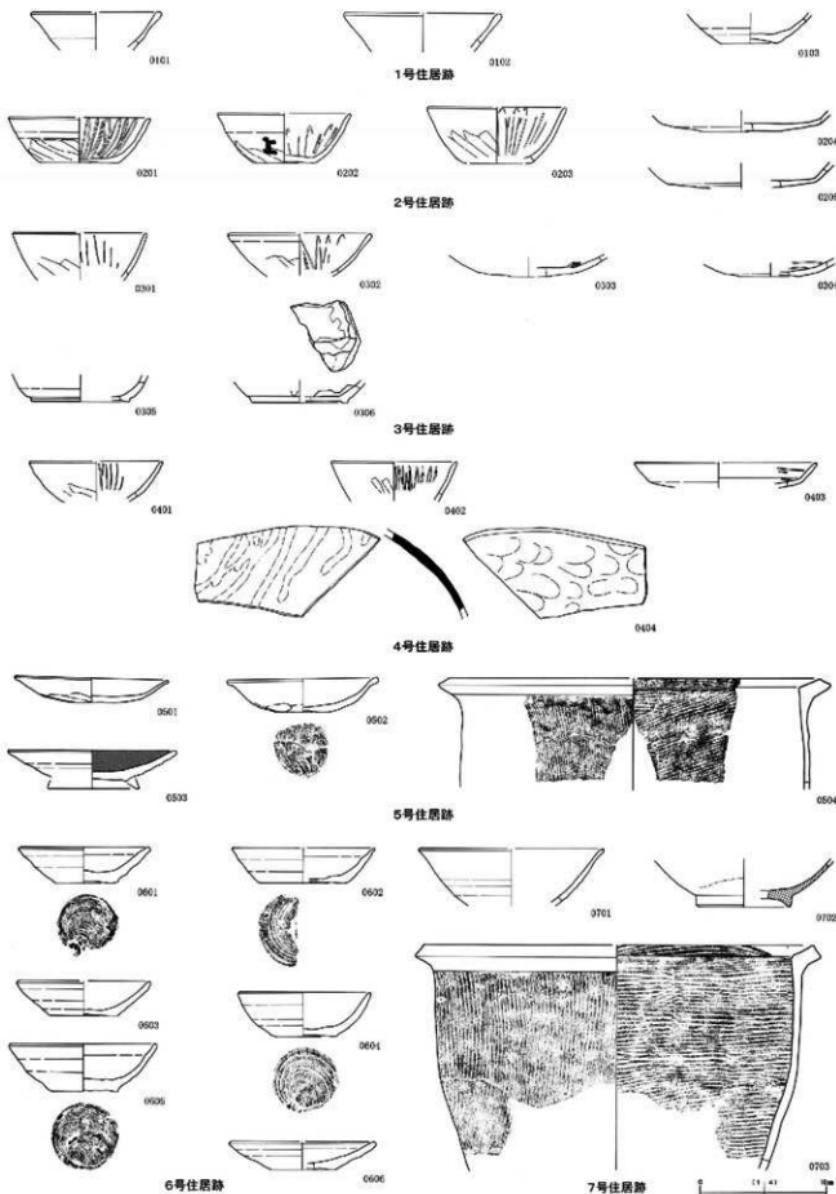
第9図 住居跡 (6)



第10図 住居跡 (7)



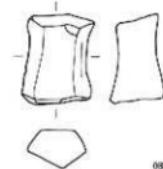
第 11 図 住居跡 (8)



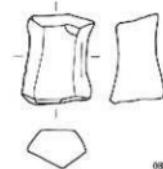
第12図 住居跡出土遺物 (1)



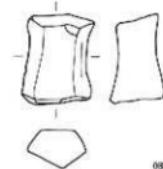
8号住居跡



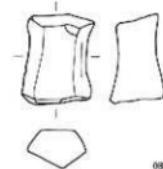
8号住居跡



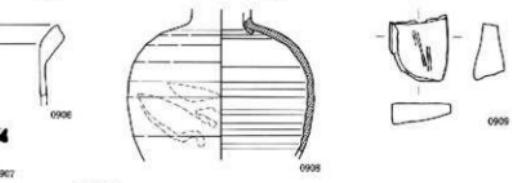
8号住居跡



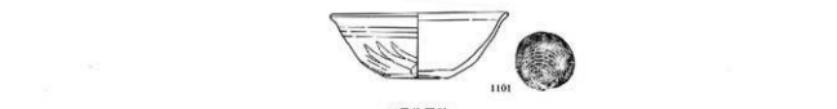
8号住居跡



9号住居跡



9号住居跡



11号住居跡



11号住居跡



11号住居跡



11号住居跡



11号住居跡



11号住居跡



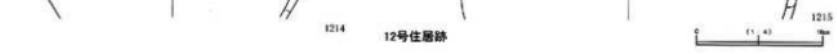
11号住居跡



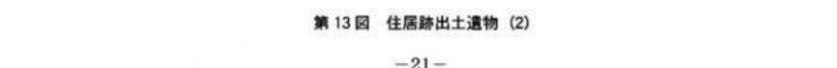
11号住居跡



11号住居跡



11号住居跡



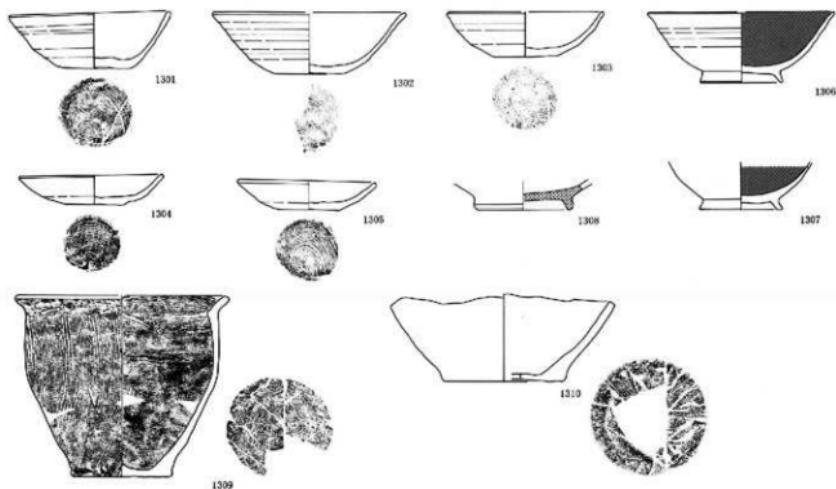
11号住居跡



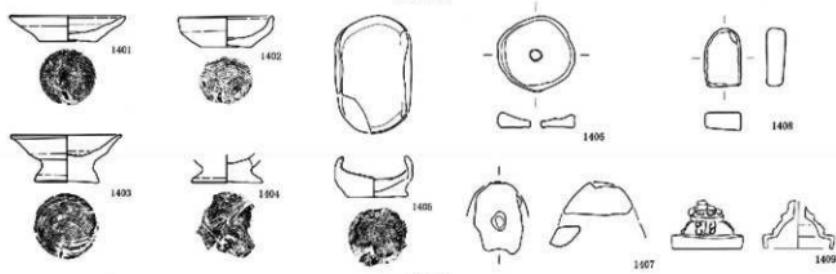
11号住居跡

cm (1+4) mm

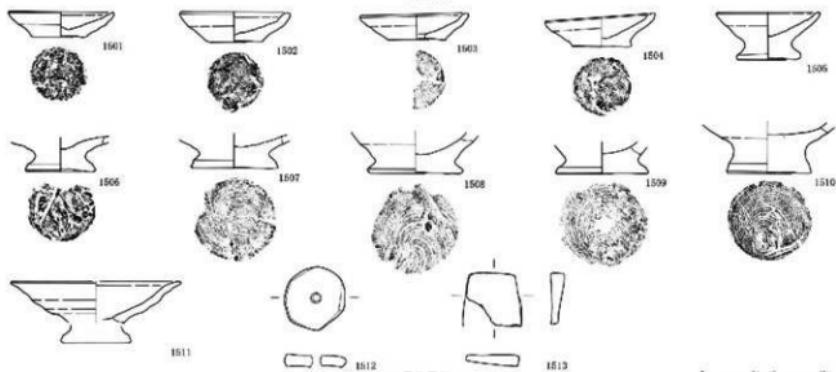
第13図 住居跡出土遺物(2)



13号住居跡



14号住居跡



第14図 住居跡出土遺物 (3)



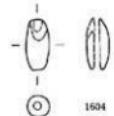
1601



1602



1603



1604

16号住居跡



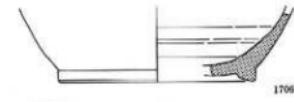
1701



1702



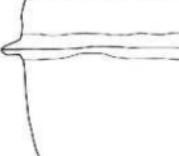
1705



1706



1703



17号住居跡



1801



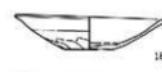
1802



1803



1809



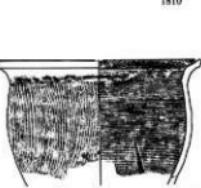
1804



1805



1806



1812



1807



1808

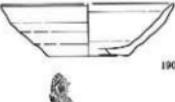
18号住居跡



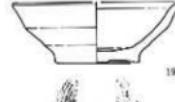
1901



1902



1903



1904



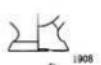
1905



1906



1907



1908

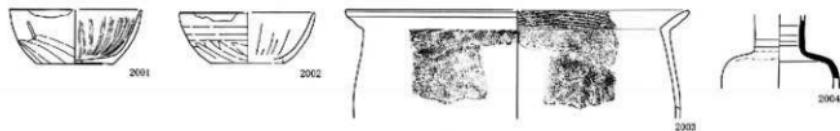


1909

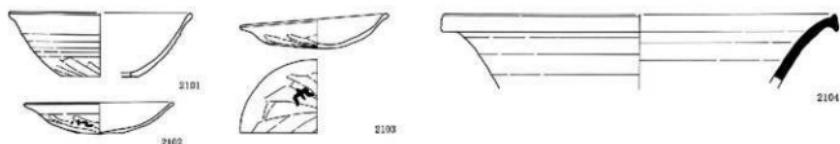


19号住居跡

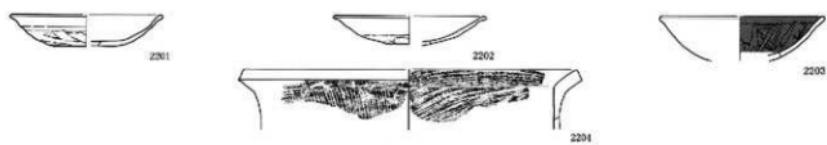
第15図 住居跡出土遺物(4)



20号住居跡



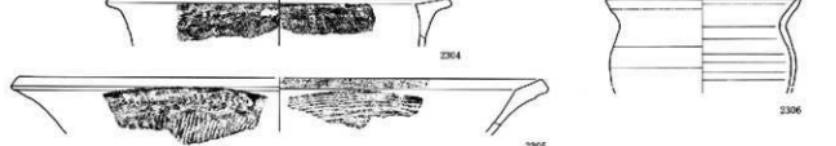
21号住居跡



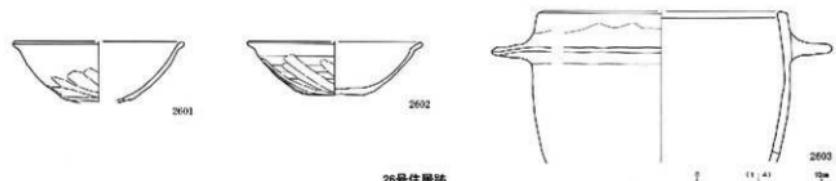
22号住居跡



23号住居跡



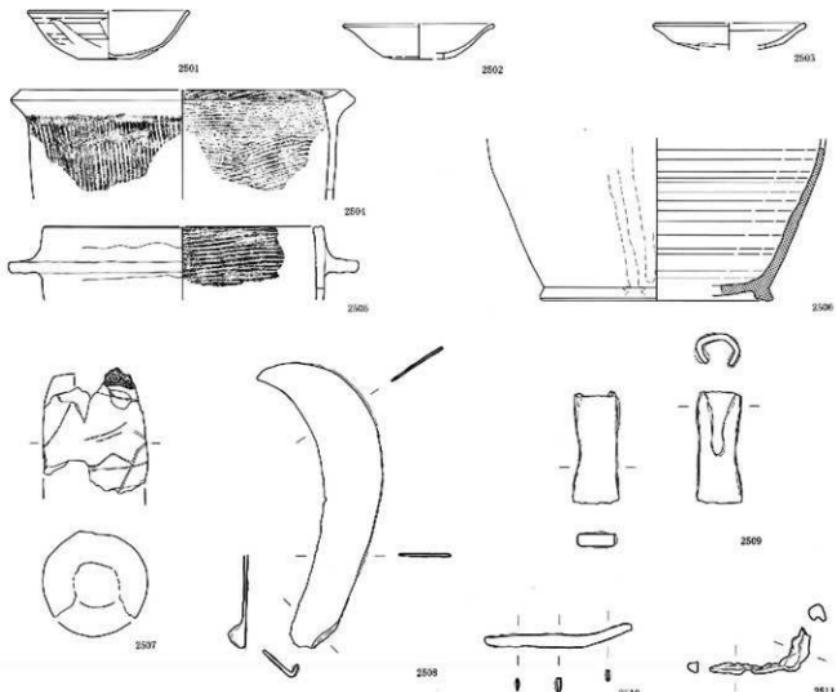
24号住居跡



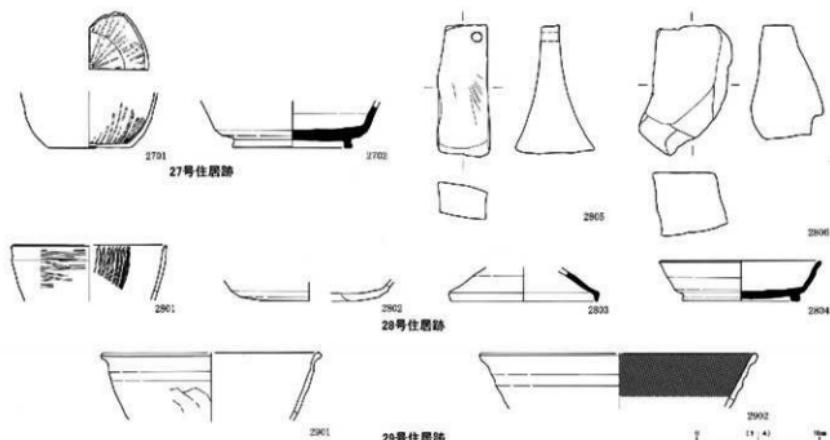
26号住居跡

(1 : 4) 1m

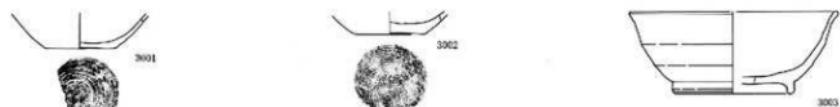
第 16 図 住居跡出土遺物 (5)



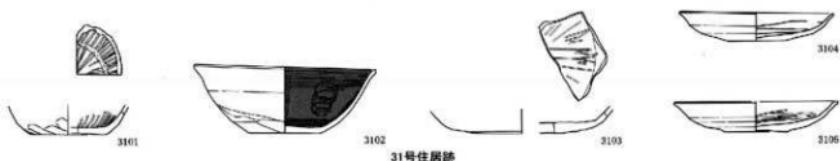
25号住居跡



第17図 住居跡出土遺物 (6)



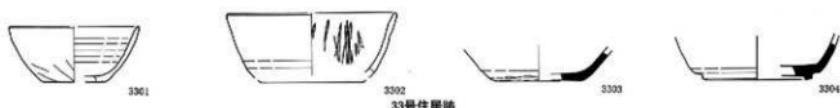
30号住居跡



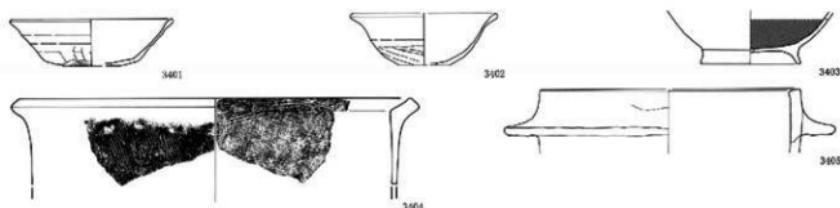
31号住居跡



32号住居跡



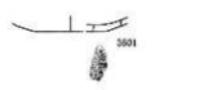
33号住居跡



34号住居跡



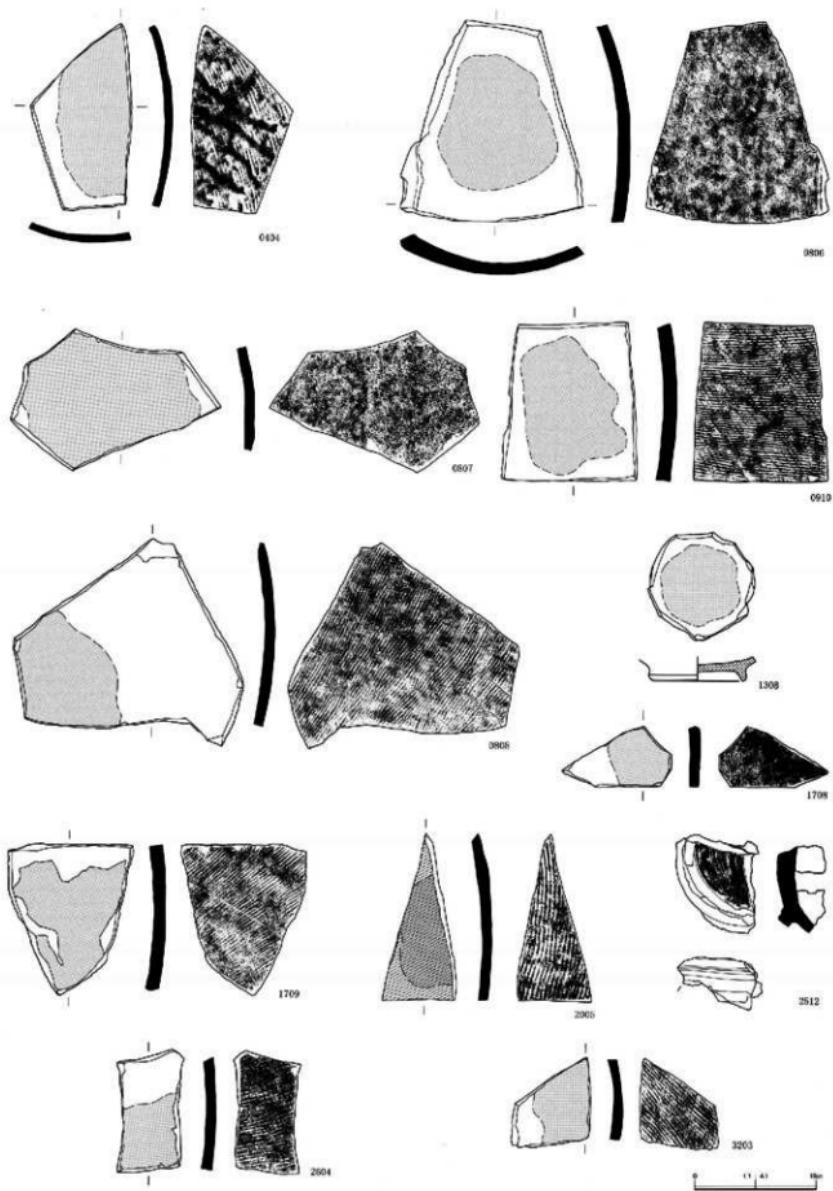
35号住居跡



36号住居跡

0 11 41 10m

第18図 住居跡出土遺物 (7)



第19図 住居跡出土遺物 (8)

No.	器種	器形	大きさ(cm)			胎土	色調	焼成	文様・調整・特徴	押送	
			高さ	口径	底径						
0101	土師器	灰	(2.6)	(10.4)	粗、赤色粒子。墨石、石英	灰白色地	灰	直		12	
0102	土師器	灰	(2.5)	(12.4)	粗、赤色粒子。墨石、石英	暗褐色地	灰	直		12	
0103	土師器	灰			(4.4) 粗、赤、白灰色粒子。石英	灰白色地	灰	西側丸切端。		12	
0201	上部器	灰	3.7	(11.2)	(8.4)	粗、赤色粒子。墨石、石英	深褐色	貝	内面体部斜放状横文、外密底部へラ削り。内面底部切端。	12	
0202	上部器	灰	4.1	(8.8)	5.0	粗、赤色粒子。墨石、石英	深褐色地	貝	内面体部斜放状横文、外密底部下半へラ削り。内面底部切端。	12	
0203	土師器	灰	(11.2)			粗、赤色粒子。墨石、石英	暗褐色地	灰	外裏一タ削り、内面斜放状横文。	12	
0204	土師器	灰	(1.1)			粗、赤色粒子。墨石、石英	暗褐色地	灰	通體状横文。	12	
0205	土師器	灰	(1.4)			粗、赤色粒子。墨石、石英墨色	暗褐色地	灰	通體状横文。	12	
0301	土師器	灰	(3.6)	(10.8)	粗、赤色粒子。墨石、石英	暗褐色地	灰	内面体部斜放状横文。		12	
0302	土師器	灰	(3.2)	(11.6)	粗、赤色粒子。墨石、石英	暗褐色地	灰	外裏一タ削り、内面斜放状横文。		12	
0303	土師器	灰	(1.6)			粗、赤色粒子。墨石、石英	暗褐色地	灰	外裏一タ削り、内面斜放状横文。	12	
0304	土師器	灰	(1.8)			やや粗、赤色粒子。墨石、石英	暗褐色地	灰	内面斜放状横文。	12	
0305	土師器	高台灰	(1.6)			(10.0) 粗、赤色粒子。墨石	暗褐色地	貝	内面通體状横文。	12	
0306	土師器	高台灰	(1.4)			(8.0) 色、金乳頭型	深黑色地	貝	内面底部斜放狀離層、埋端の可塑性あり。	12	
0401	土師器	灰	(2.9)	(10.8)	粗、赤色粒子。墨石、石英	暗褐色地	灰	外裏一タ削り、内面斜放状横文。		12	
0402	土師器	灰	(2.7)	(10.0)	粗、赤色粒子。墨石、石英	暗褐色地	灰	外密底部へラ削り、内面斜放状横文。		12	
0403	土師器	灰	(1.9)	(15.6)	粗、赤色粒子。墨石、石英	暗褐色地	灰	内面通體状横文。		12	
0404	原形陶器	壺・瓶形瓶	14.9	8.6	3.6	粗、墨石、石英、白灰色粒子	暗褐色地	灰	外密底部へ削り、内面斜放状横文。	12	
0501	土師器	灰	2.1	12.4	4.0	やや粗、赤色粒子。墨石、墨石	暗褐色地	貝	外密底部へ削り。	12	
0502	土師器	粗	2.9	12.2	4.4	やや粗、赤色粒子。墨石、石英	暗褐色地	貝	外密底部切端。	12	
0503	土師器	墨色高白胎	13.5			粗、赤色粒子。墨石、石英	暗褐色地	貝	外密底部切端。	12	
0504	土師器	灰	30.0			粗、墨石、石英、金色雲母	墨黑色地	貝	内面底部高白胎。	12	
0601	土師器	灰	3.0	10.4	5.2	粗、墨石、石英、金色雲母	暗褐色地	貝	内外面一ヶ開闊。	12	
0602	土師器	灰	3.9	(11.6)	粗、墨石、石英、金色雲母	暗褐色地	貝	底部半切端。	12		
0603	土師器	灰	2.9	(12.0)	(5.8)	粗、赤色粒子。墨石、石英、金色雲母	暗褐色地	貝	底部半切端。	12	
0604	土師器	灰	4.6	10.8	5.0	粗、墨石、石英、金、黑色雲母	暗褐色地	貝	底部半切端。	12	
0605	土師器	灰	4.0	11.6	5.4	やや粗、墨石、石英、金、黑色雲母	暗褐色地	貝	底部半切端。	12	
0606	土師器	灰	2.3	10.0	3.4	粗、墨石、石英、白色雲母	黄褐色地	貝	底部半切端。	12	
0701	土師器	灰		(15.0)		粗、赤色粒子。墨石	暗褐色地	貝	内面底部高白胎。	12	
0702	火鉢形陶器	碗				(7.2) 粗、口、白色粒子	反褐色地	貝	底知。	12	
0703	土師器	灰		(33.6)		粗、墨石、石英、白色雲母	暗褐色地	貝	内外面一ヶ開闊。	12	
0801	土師器	灰	(4.4)	(13.6)	粗、赤色粒子。墨石	暗褐色地	貝	内面斜放状横文、外面へラ削り。		13	
0802	土師器	灰	4.2	11.0	4.8	粗、赤色粒子。墨石、墨色	暗褐色地	貝	内面斜放状横文、外面へラ削り。		13
0803	土師器	灰				(10.8) (4.2) 粗、赤色粒子。墨石	暗褐色地	貝	内面斜放状横文、外面へラ削り。		13
0804	土師器	灰				5.6 粗、赤色粒子。墨石	暗褐色地	貝	内面斜放状横文。		13
0901	土師器	灰	(4.3)	(8.0)	(6.0)	粗、赤色粒子。墨石、石英	墨褐色地	貝	体側外へラ削り。		13
0902	土師器	灰	4.2	(12.8)	4.4	やや粗、赤色粒子。墨石	暗褐色地	貝	外密底部へラ削り。		13
0903	土師器	灰	4.0	(12.8)	4.8	粗、赤色粒子。墨石、石英	暗褐色地	貝	外密底部へラ削り。		13
0904	土師器	灰	3.9	(12.6)	3.6	粗、赤色粒子。墨石	暗褐色地	貝	外密底部へラ削り。		13
0905	土師器	灰	4.2	12.6	3.7	粗、赤色粒子。墨石	暗褐色地	貝	外密底部へラ削り。		13
0906	土師器	灰		(30.0)		粗、墨石、石英、金色雲母	暗褐色地	貝	内外面一ヶ開闊。		13
0907	煮沸器	灰		(21.8)		粗、口、白粒子	暗褐色地	貝			13
0908	灰陶器	是那型				粗、墨、白色粒子	反褐色地	貝	外面上半部斜端。		13
1101	土師器	灰	5.5	14.2	5.0	やや粗、赤色粒子	暗褐色地	貝	外密底部へラ削り。		13
1201	上部質土器	即高台合併				粗、墨石、金、白色雲母	暗褐色地	貝	ロクリ回転。		13
1202	上部質土器	即高台合併				赤、墨石、金、白色雲母	暗褐色地	貝	ロクロ回転。		13
1203	上部質土器	即高台合併				中や粗、赤色粒子。墨石、石英	暗褐色地	貝	ロクロ回転、口疊加スコ付箇。		13
1204	土師質土器	灰			(15.6)	粗、赤色粒子。墨石	暗褐色地	貝	底斜削。		13
1205	上部質土器	灰	4.7	13.8	5.6	粗、赤色粒子。墨石	暗褐色地	貝	底斜削。		13
1206	土師質土器	小皿	2.2	10.3	4.4	粗、墨石、金、黑色雲母	暗褐色地	貝	底斜削。		13
1207	上部質土器	小皿	2.3	9.4	4.9	粗、墨石、金、黑色雲母	暗褐色地	貝	底斜削。		13
1208	土師質土器	小皿	2.3	9.2	4.4	粗、墨石、金、黑色雲母	暗褐色地	貝	底斜削。		13
1209	上部質土器	小皿	2.2	9.7	5.0	粗、墨石、金、黑色雲母	暗褐色地	貝	底斜削。		13
1210	土師質土器	小皿	2.3	9.2	4.6	粗、墨石、金、黑色雲母	暗褐色地	貝	底斜削。		13
1211	上部質土器	小皿	1.8	(8.6)	4.2	粗、墨石、金、黑色雲母	暗褐色地	貝	底斜削。		13
1212	上部質土器	小盤	2.9	7.3	4.6	やや粗、赤石、墨石、金色雲母	暗褐色地	貝	底斜削。		13
1213	磁器	白磁底			4.6 粗、黑色粒子	乳白色	貝	大家府朝年白磁X1類(10後半~11中期)。		13	
1214	上部器	筒?		(22.0)		粗、墨石、石英、小石	暗褐色地	貝	(1)剥離(2)無く外観。		13
1215	土師器	足盆		(27.2)		粗、墨石、石英、金色雲母	暗褐色地	貝	脚部内側の脚が金屬。		13
1216	土製品	椎(おもり)	7.4	6.0	5.8	粗、墨、白色粒子。小石、赤、黄、白色雲母	暗褐色地	貝	上部に瓦張約6mmの漆耳あり。		13
1301	土師器	灰	4.8	13.1	9.5	粗、赤色粒子。墨石	暗褐色地	貝	底斜削。		14
1302	土師器	灰	5.1	15.6	5.8	粗、赤色粒子。墨石	暗褐色地	貝	底斜削。		14
1303	土師器	灰	3.6	(13.8)	5.2	粗、赤色粒子。墨石	暗褐色地	貝	底斜削。		14
1304	土師器	灰	2.6	11.8	5.0	粗、赤色粒子。墨石	暗褐色地	貝	底斜削。		14
1305	土師器	灰	2.5	10.9	5.0	粗、赤色粒子。墨石	暗褐色地	貝	底斜削。		14
1306	土師器	高台灰	5.8	(15.2)	(8.6)	粗、赤色粒子。墨石	暗褐色地	貝	内風土器。		14
1307	土師器	高台灰				粗、赤色粒子。墨石	暗褐色地	貝	底斜削。		14
1308	灰陶器	面・輪・環				粗、赤色粒子。墨石	暗褐色地	貝	底斜削。		14
1309	土師器	小内壁			15.0 (17.0)	8.4 粗、墨石、石英、金色雲母	暗褐色地	貝	内面底部堅硬、周縁部内側堅硬。		14
1310	土師器	灰			9.7 粗、赤色粒子。小石、金、黑色雲母	暗褐色地	貝	体側割れ口部分に断痕が全周。		14	
1401	上部質土器	小皿	2.1	9.4	4.6	粗、墨石、石英、金色雲母	暗褐色地	貝	底斜削。		14
1402	上部質土器	有孔皿	2.6	7.5	4.2	粗、墨石、石英、金色雲母	暗褐色地	貝	底斜削。		14
1403	上部質土器	有孔小皿	4.0	9.0	5.2	粗、墨石、石英、金色雲母	暗褐色地	貝	底斜削。		14
1404	上部質土器	有孔皿			(5.6) 粗、墨石、石英、金色雲母	暗褐色地	貝	底斜削。		14	
1405	上部質土器	上部八割円盤	3.1	5.6	5.0 粗、墨石、石英、金色雲母	暗褐色地	貝	底斜削。		14	
1406	上部質土器	椎(おもり)			粗、墨石、石英、金色雲母	暗褐色地	貝	底斜削。		14	
1407	土製品	椎(おもり)			粗、墨石、石英、金色雲母	暗褐色地	貝	底斜削6mmの突起あり。1216と同様。		14	

第1表 住居跡出土遺物一覧(1)

No.	器種	器形	大きさ(cm)			胎土	色調	施成	文様・調整・特徴		埠因
			縦	横	厚				文様	調整	
1501	土師質土器	小皿	2.1	5.5	5.5	陶、全・黒色雲母	暗灰色	良	波打回転丸底。		14
1502	土師質土器	小皿	2.5	8.7	4.0	陶、赤石、金・黑色雲母	暗灰色	良	波打回転丸底。		14
1503	土師質土器	小皿	2.2	(8.7)	4.8	陶、赤石、金・黑色雲母	暗灰色	良	波打回転丸底。		14
1504	土師質土器	小皿	2.8	8.8	4.8	陶、赤石、金・黑色雲母	暗灰色	良	波打回転丸底。		14
1505	土師質土器	珪状高台小皿	3.9	(8.3)	5.0	陶、赤石、金・黑色雲母	暗灰色	良	波打回転丸底。		14
1506	土師質土器	小皿	2.0	5.5	5.6	陶、赤石、石英、赤・黑色雲母	暗灰色	良	波打回転丸底。		14
1507	土師質土器	小皿	2.5	7.2	5.0	陶、赤石、金・黑色雲母	暗灰色	良	波打回転丸底。		14
1508	土師質土器	小皿	2.8	7.4	5.0	陶、赤石、金・黑色雲母	暗灰色	良	波打回転丸底。		14
1509	土師質土器	小皿	2.8	7.2	5.0	陶、赤石、石英、金・黑色雲母	暗灰色	良	波打回転丸底。		14
1510	土師質土器	珪状高台碗	6.8			陶、赤石、金・黑色雲母	暗灰色	良	波打回転丸底。		14
1511	土師質土器	珪状高台碗?	(12.0)			陶、赤石、金・黑色雲母	暗灰色	良	波打回転丸底。		14
1512	土師質土器	土器片割開	2.6	9.3	4.6	陶、赤石、金・黑色雲母	暗灰色	良	波打回転丸底。		14
1501	土師質土器	小皿	3.2	5.5	5.0	陶、赤石、金・黑色雲母	暗灰色	良	波打回転丸底。		15
1502	土師質土器	高台小皿	2.9	7.8	4.4	陶、赤石、金・黑色雲母	暗灰色	良	波打回転丸底。		15
1503	土師質土器	小皿	2.9	7.8	4.4	陶、赤石、金・黑色雲母	暗灰色	良	波打回転丸底。		15
1504	土師器	土器				陶、赤色粒子、赤石、金・黑色雲母	暗灰色	良	波打回転丸底。		15
1701	土師質土器	珪状高台碗?	(7.4)			陶、赤色粒子、赤石、金・黑色雲母	暗灰色	良	波打回転丸底。		15
1702	土師質土器	小皿	2.3	(10.0)	5.0	陶、赤色粒子、赤石、金・黑色雲母	暗灰色	良	波打回転丸底。		15
1703	土師質土器	片?	4.7	(18.6)	(6.8)	陶、赤石、金・黑色雲母	暗灰色	良	波打回転丸底。		15
1704	土師器	羽輪				陶、赤石、金・黑色雲母	暗灰色	良	波打回転丸底。		15
1705	灰陶陶器	瓶?				陶、赤色粒子、赤石、金・黑色雲母	灰白色	良	波打回転丸底。		15
1706	灰陶陶器	瓶?				陶、赤色粒子、赤石、金・黑色雲母	灰白色	良	波打回転丸底。		15
1801	土師器	片?	4.7	(12.1)	5.3	陶、赤色粒子、赤石、小石	暗灰色	良	波打回転丸底。		15
1802	土師器	片?	3.8	(12.2)	(5.0)	陶、赤色粒子、石英	暗灰色	良	波打回転丸底。		15
1803	土師器	片?	4.1	(13.0)	5.0	陶、赤色粒子、赤石	暗灰色	良	波打回転丸底。		15
1804	土師器	片?	2.9	11.9	4.2	陶、赤色粒子、赤石、石英	暗灰色	良	波打回転丸底。		15
1805	土師器	片?	2.7	12.0	3.7	陶、赤色粒子、赤石、石英	暗灰色	良	波打回転丸底。		15
1806	土師器	片?	2.7	12.0	5.0	陶、赤石	暗灰色	良	波打回転丸底。		15
1807	土師器	片?	2.6	12.3	5.6	陶、赤色粒子、赤石、小石	暗灰色	良	波打回転丸底。		15
1808	土師器	片?	2.2	11.5	4.6	陶、赤色粒子、赤石、石英	暗灰色	良	波打回転丸底。		15
1809	土師器	高台坪		(15.2)		陶、赤色粒子、赤石	暗灰色	良	波打回転丸底。		15
1810	土師器	高台坪		(8.4)		陶、赤色粒子、赤石	暗灰色	良	波打回転丸底。		15
1811	土師器	小皿?				陶、赤石、石英	暗灰色	良	外唇部回転方向のハケ台。		15
1812	土師器	盤?				陶、赤石、石英、金・黑色雲母	暗灰色	良	外唇部回転方向のハケ台。		15
1901	土師質土器	小皿	2.7	9.1	4.6	陶、赤石、石英、金・黑色雲母	暗灰色	良	波打回転丸底。		15
1902	土師質土器	小皿	4.1	9.0	4.6	陶、赤石、石英、金・黑色雲母	暗灰色	良	波打回転丸底。		15
1903	土師質土器	片?	4.3	(14.0)	(6.8)	陶、赤石、黑毛苔	暗灰色	良	波打回転丸底。		15
1904	土師質土器	片?	5.0	(13.4)	(6.8)	陶、赤石、黑色雲母	暗灰色	良	波打回転丸底。		15
1905	土師質土器	片?	6.0			陶、赤石、黑色雲母	暗灰色	良	波打回転丸底。		15
1906	土師質土器	片?	7.8			陶、赤石、金・黑色雲母	暗灰色	良	波打回転丸底。		15
1907	土師質土器	珪状高台碗?	8.0			陶、赤石、金・黑色雲母	暗灰色	良	波打回転丸底。		15
1908	土師質土器	珪状高台小皿	(5.0)			陶、赤石、金・黑色雲母	暗灰色	良	波打回転丸底。		15
1909	土製品	土器				陶、赤色粒子、美石	暗灰色	良	波打回転丸底。		15
2001	土師器	片?	4.5	(10.8)	(6.4)	陶、赤色粒子、赤石、石英	暗灰色	良	内唇部回転丸底。		15
2002	土師器	片?	4.2	(10.8)	(6.0)	陶、赤色粒子、赤石	暗灰色	良	内唇部回転丸底。		15
2003	土師器	盤?	(27.8)			陶、赤色粒子、黑色雲母	暗灰色	良	内唇部回転丸底。		15
2004	土製品	小皿?				陶、黑色粒子	暗灰色	良	内唇部回転丸底。		15
2011	土師器	片?	6.3	(14.7)	(6.4)	陶、赤色粒子、赤石、金・黑色雲母	暗灰色	良	内唇部回転下ギザ削り。		15
2102	土師器	片?	2.7	11.9	3.6	陶、赤色粒子、赤石	暗灰色	良	内唇部回転下ギザ削り。		15
2103	土師器	片?	2.9	11.8	2.0	陶、赤色粒子、赤石、石英	暗灰色	良	内唇部回転下ギザ削り、腹裏あり。		15
2104	土製品	大甕?	(31.6)			陶、白、赤色粒子	暗灰色	良	内唇部回転下ギザ削り、腹裏あり。		15
2201	土師器	片?	2.6	(12.2)	(5.0)	陶、赤石、赤色粒子、美石	暗灰色	良	内唇部回転下ギザ削り。		15
2202	土師器	片?				陶、赤石、赤色粒子、美石、黑色雲母	暗灰色	良	内唇部回転下ギザ削り。		15
2203	土師器	片?	(13.0)			陶、赤石、黑色雲母	暗灰色	良	内唇部回転下ギザ削り。		15
2204	土師器	片?	(27.0)			陶、赤石、黑色雲母	暗灰色	良	内唇部回転下ギザ削り。		15
2205	土師器	片?	(27.8)			陶、赤石、黑色雲母	暗灰色	良	内唇部回転下ギザ削り。		15
2206	土師器	片?	(6.3)			陶、赤色粒子、赤石、金・黑色雲母	暗灰色	良	内唇部回転下ギザ削り。		15
2207	土師器	片?	(2.7)			陶、赤色粒子、赤石	暗灰色	良	内唇部回転下ギザ削り。		15
2208	土師器	片?	(2.9)			陶、赤色粒子、赤石、石英	暗灰色	良	内唇部回転下ギザ削り。		15
2209	土師器	片?	(3.5)			陶、赤色粒子、赤石、石英	暗灰色	良	内唇部回転下ギザ削り。		15
2210	土師器	片?	(7.7)			陶、赤色粒子、赤石、石英	暗灰色	良	内唇部回転下ギザ削り。		15
2211	土師器	片?	(21.0)			陶、赤色粒子、赤石、石英	暗灰色	良	内唇部回転下ギザ削り。		15
2212	土師器	片?	(21.0)			陶、赤色粒子、赤石、石英	暗灰色	良	内唇部回転下ギザ削り。		15
2213	土師器	片?	(42.8)			陶、赤石、黑色雲母	暗灰色	良	内唇部回転下ギザ削り。		15
2206	土師器	小皿?	(15.6)			陶、赤石、石英、金色雲母	暗灰色	良	内唇部回転下ギザ削り。		15
2401	土師器	片?	(11.4)			陶、赤石、石英、黑色雲母	暗灰色	良	内唇部回転下ギザ削り。		15
2402	土師器	片?	(16.6)			陶、赤色粒子、赤石	暗灰色	良	内唇部回転下ギザ削り。		15
2403	土師器	片?	(17.6)			陶、赤石、金・黑色雲母	暗灰色	良	内唇部回転下ギザ削り。		15
2501	土師器	片?	4.0	(9.7)	(5.0)	陶、赤色粒子、赤石、石英	暗灰色	良	内唇部回転下ギザ削り。		15
2502	土師器	片?	2.9	(12.2)	(4.2)	陶、赤色粒子、赤石、石英	暗灰色	良	内唇部回転下ギザ削り。		15
2503	土師器	片?	(12.1)			陶、赤色粒子、赤石、小石	暗灰色	良	内唇部回転下ギザ削り。		15
2504	土師器	片?	(26.2)			陶、赤石、石英、黑色雲母	暗灰色	良	内唇部回転下ギザ削り。		15
2505	土師器	片?	(21.4)			陶、赤石、石英、金色雲母	暗灰色	良	内唇部回転下ギザ削り。		15
2506	灰陶陶器	瓶?	(18.8)			陶、赤色粒子、赤石、石英	灰白色	良	内唇部回転下ギザ削り。		15
2507	土製品	ゴブの箱?				陶、赤色粒子、赤石、黑色雲母	灰白色	良	最大長10.5cm、最大幅5.6cm、最大深2.6cm。		15
2601	土師器	片?				陶、赤色粒子、赤石、石英	暗灰色	良	外唇部回転下ギザ削り。		15
2602	土師器	片?	4.4	(14.2)	4.8	陶、赤色粒子、赤石、石英	暗灰色	良	外唇部回転下ギザ削り。		15
2603	土師器	羽輪				陶、赤色粒子、赤石、金・黑色雲母	暗灰色	良	外唇部回転下ギザ削り。		15
2701	土師器	片?				陶、赤色粒子、赤石	暗灰色	良	内唇部回転下ギザ削り。		15
2702	土師器	高台坪				陶、白色粒子、赤石、黑色雲母	暗灰色	良	内唇部回転下ギザ削り。		15
2801	土師器	片?				陶、白色粒子、赤石、石英	暗灰色	良	内面斜方回転丸底。		15
2802	土師器	盤状?	(8.8)			陶、白色粒子、赤石、石英	暗灰色	良	内面斜方回転丸底。		15
2803	土製品	盤?	(11.8)			陶、白色粒子、赤石	暗灰色	良	内面斜方回転丸底。		15
2804	土製品	皿?	3.4	13.0	9.3	陶、白色粒子、赤石、小石	暗灰色	良	内面斜方回転丸底。		15
2901	土師器	片?				陶、白色粒子、赤石	暗灰色	良	外唇部回転下ギザ削り。		15
2902	土師器	片?・鉢?				陶、白色粒子、赤石	暗灰色	良	外唇部回転下ギザ削り。		15

第2表 住居跡出土遺物一覧 (2)

No.	器種	器形	大きさ		胎土	色調	焼成	文様・調整・特徴	押印
			最大径	口径					
3001	土師器	片	2.4		(5.6)	白、黑色粒子、黄土、小石	黄褐色	丸、近鉄印記長少痕。	18
3002	土師器	片	2.5		5.8	白、黑色粒子、黄土、石砾	黄褐色	丸、近鉄印記少痕。	18
3003	土師器	高台片	6.8		(9.0)	白、黑色粒子、黄土、石砾	浅褐色	丸、内面焼付状況文。	18
3101	土師器	片			(6.2)	白、黑色粒子、石砾	深褐色	丸、内面焼付状況文、外面部削りヘラ削り。	18
3102	土師器	黑色片	6.7	14.6	5.8	白、黑色粒子、黄土、石砾	深褐色	丸、内面焼付、六面窓、焼位と焼帯状の焼き。	18
3103	土師器	片			(6.6)	白、黑色粒子、黄土、石砾	深褐色	丸、内面焼付状況文。	18
3104	土師器	片	2.5	13.3	4.5	白、黑色粒子、黄土	深褐色	丸、内面焼付状況文。	18
3105	土師器	片	2.5	(13.1)	(5.1)	白、黑色粒子、黄土、石砾	深褐色	丸、内面焼付状況文。	18
3201	土師器	片	6.1	(10.2)	(4.8)	白、黑色粒子、黄土	白青褐色	丸、内面焼付状況文。	18
3202	土師器	片			(3.6)	白、黑色粒子、黄土	深褐色	丸、内面焼付→削り。	18
3301	土師器	片	4.8	(10.5)	(5.0)	白、黑色粒子、黄土、石砾	深褐色	丸、内面焼付→削り。	18
3302	土師器	片	(4.9)	13.8	8	白、黑色粒子、黄土、石砾、金色雲母	深褐色	丸、内面焼付状況文。	18
3303	須恵器	片			(6.4)	白、黑色粒子	灰褐色	丸、外面部削りヘラ削り。	18
3304	須恵器	高台片			(8.8)	白、黑色粒子、黄土	明茶褐色	丸、外面部削りヘラ削り。	18
3401	土師器	片	3.9	(13.0)	(4.6)	白、黑色粒子、黄土、小石	深褐色	丸、外面部削り下へヘラ削り。	18
3402	土師器	片	4.2	(11.6)	(4.2)	白、黑色粒子、黄土	深褐色	丸、外面部削り下へヘラ削り。	18
3403	土師器	黑色高台片			(7.8)	白、黑色粒子、黄土、金・黑色雲母	深褐色	丸、内面横方向のハケ目、外底部方向のハケ目。	18
3404	土師器	片			(32.0)	白、黑色粒子、金色雲母	深褐色	丸、内面横方向のハケ目、外底部方向のハケ目。	18
3405	土師器	片			(21.0)	白、黄色粒子、黄土	深赤茶褐色	丸、内面横方向のハケ目。	18
3501	須恵器	高台片			(8.4)	白、黑色粒子	灰白色	丸、内面横方向のハケ目。	18
3502	灰陶器	片?				白、黑色粒子	灰白色	丸、内面横方向のハケ目。	18
3601	土師器	片?			(8.0)	白、黑色粒子、黑色實物	深褐色	丸、内面横方向のハケ目。	18
3602	土師器	羽垂			(20.4)	白、黄色粒子	水冰褐色	丸、内面横方向のハケ目、外底部方向のハケ目。	18

第3表 住居跡出土遺物一覧(3)

No.	器種	器形	大きさ(cm)			胎土	色調	焼成	文様・調整・特徴	押印
			最大径	最小径	高さ					
0404	須恵器	掌・輪形足	14.9	8.3	0.6	白、黑色粒子	灰褐色	丸、外底部削り、脚部、内面に擦痕。	12-19	
0806	須恵器	掌・輪形足	16.6	19.1	1.4	白、黑色粒子	灰褐色	丸、内面に擦痕。	19	
0807	須恵器	掌・輪形足	11.7	12.7	0.8	白、黑色粒子	灰褐色	丸、内面に擦痕。	19	
0808	須恵器	掌・輪形足	17.2	18.8	0.8	白、黑色粒子	灰褐色	丸、内面の片側に擦痕。	19	
0910	須恵器	掌・輪形足	13.2	11.1	1.1	白、黑色粒子	黑灰色	丸、内面に擦痕に黒斑と擦痕。	19	
1308	灰陶器	掌・輪形足	8.9	8.7	0.6	白、黑色粒子	灰白色	丸、内底部黒斑、周縁部打撲跡。	14-19	
1708	須恵器	掌・輪形足	(5.0)	(9.0)	0.85	白、黑色粒子	灰褐色	丸、内面に擦痕。	19	
1709	須恵器	掌・輪形足	12.5	10.3	1.2	白、黑色粒子、小窓	灰褐色	丸、内面に擦痕。	19	
2005	須恵器	掌・輪形足	13.7	6.0	1.0	白、黑色粒子	青灰褐色	丸、擦痕、内面に擦痕。	19	
2512	須恵器	掌・輪形足	8.1	6.8	0.8	白、黑色粒子	墨青褐色	丸、擦痕の内側を転写。	19	
2604	須恵器	掌・輪形足	9.8	5.6	0.8	白、黑色粒子	深青褐色	丸、内面に擦痕、26-27件一括。	19	
3203	須恵器	掌・輪形足	6.7	6.4	0.8	白、黑色粒子	墨灰色	丸、内面に擦痕。	19	

第4表 住居跡出土遺物一覧(4)

No.	片割幅(cm)	石材	特 樹		押印	No.	片割幅(cm)	特 樹	押印
			最大径	最小径					
0805	7.3	5.7	3.2		花崗岩	既切、側面の片面が既削。	13		
0909	5.0	4.7	2.4		花崗岩	既切、既削、既削中央に擦痕あり。	13		
1408	4.8	2.9	1.4		花崗岩	既削。	14		
1513	4.3	4.3	1.1		花崗岩	既削。	14		
1707	4.2	6.0	3.5		花崗岩	既削。	15		
2703	4.8	4.7	2.3		花崗岩	既削。	17		
2704	6.3	3.2	1.2		花崗岩	既削。			
2805	11.0	4.2	8.4		花崗岩	既削、表面に磨削した跡。	17		
2806	10.4	6.3	5.9		花崗岩	既削。			
2508	23.4	5.2	0.5			铁製。			
2509	8.9	3.6	2.4			铁製。			17
2510	11.9	1.3	0.8			铁製。			

第6表 住居跡出土鉄製品一覧

No.	片割幅(cm)	特 樹	押印
1409	4.0	5.6	0.6
2611	8.6	3.6	1.3

第7表 住居跡出土銅製品一覧

第5表 住居跡出土石器一覧

2. その他の遺構

a. 土坑 (第20、21図、第7表、図版7)

調査をおこなった範囲内では、調査区Aの北東側にかけて上坑が偏在する傾向がみられた。

b. ピット (第20図、第8表)

ピットは、調査区Aの北西側でまとまり確認されたが、互いのピットどおしで規則的に並ぶものはみられない。

しかし、調査区の南西側に位置する土坑12・13は坑内ないし覆土中にピット状の掘り込みが観察されており、これら両土坑と北東部に位置するP8・9との位置関係からみて四本柱の建物跡であった可能性も考えられる。

No.	グリッド	形態	規模 (m)			備考	図版
			長軸	短軸	深さ		
1号	A-4	方型	1.07	0.75	0.25		
2号	A-4	不整形	0.75	0.70	0.25		7
3号	A-3	方型	(0.97)	0.97	0.92		7
4号	A-3	不整形	1.08	0.75	0.29		
5号	B-4	不整形	1.05	1.25	0.17		
6号	A-4	不整形	(1.10)	0.63	0.37		7
7号	B-2	不整形	0.78	0.64	0.27		
8号	A-3	不整形	0.92	0.86	0.47	12号住より古。	7

No.	グリッド	形態	規模 (m)			備考	図版
			長軸	短軸	深さ		
9号	A-3	橢円形	0.85	0.67	0.38	12号住より古。	7
10号	C-3	橢円形	0.69	0.52	0.32		
11号	C-3	不整形	0.90	0.70	0.25		
12号	B-1	橢円形	1.23	1.05	0.37		7
13号	B-1	橢円形	1.00	0.88	0.34		7
14号	O-1	円形	0.72	0.61	0.22		
15号	A-3	不整形	0.77	0.72	0.32		7
16号	A-5	円形	0.74	(0.48)	0.25		

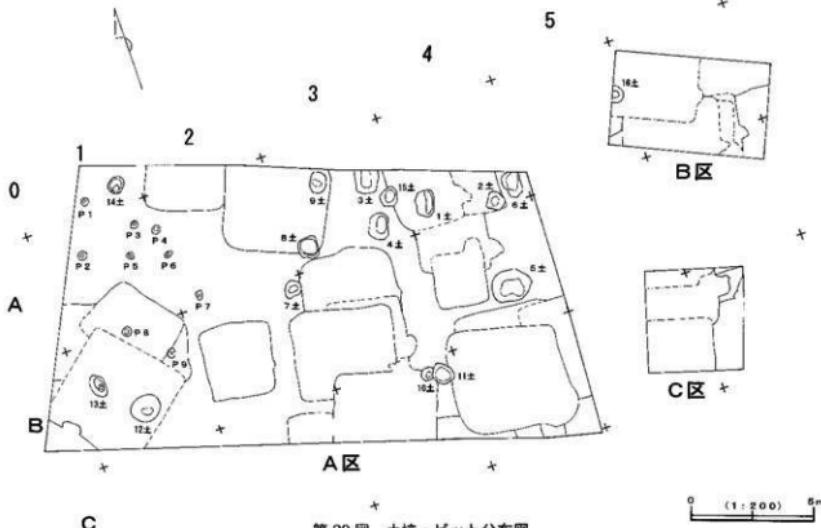
第8表 土坑一覧

No.	グリッド	規模 (cm)			備考
		長軸	短軸	深さ	
P1	O-1	0.36	0.35	0.26	
P2	A-1	0.38	0.36	0.21	
P3	A-1	0.37	0.30	0.23	
P4	A-1・2	0.37	0.37	0.12	
P5	A-1	0.35	0.27	0.26	

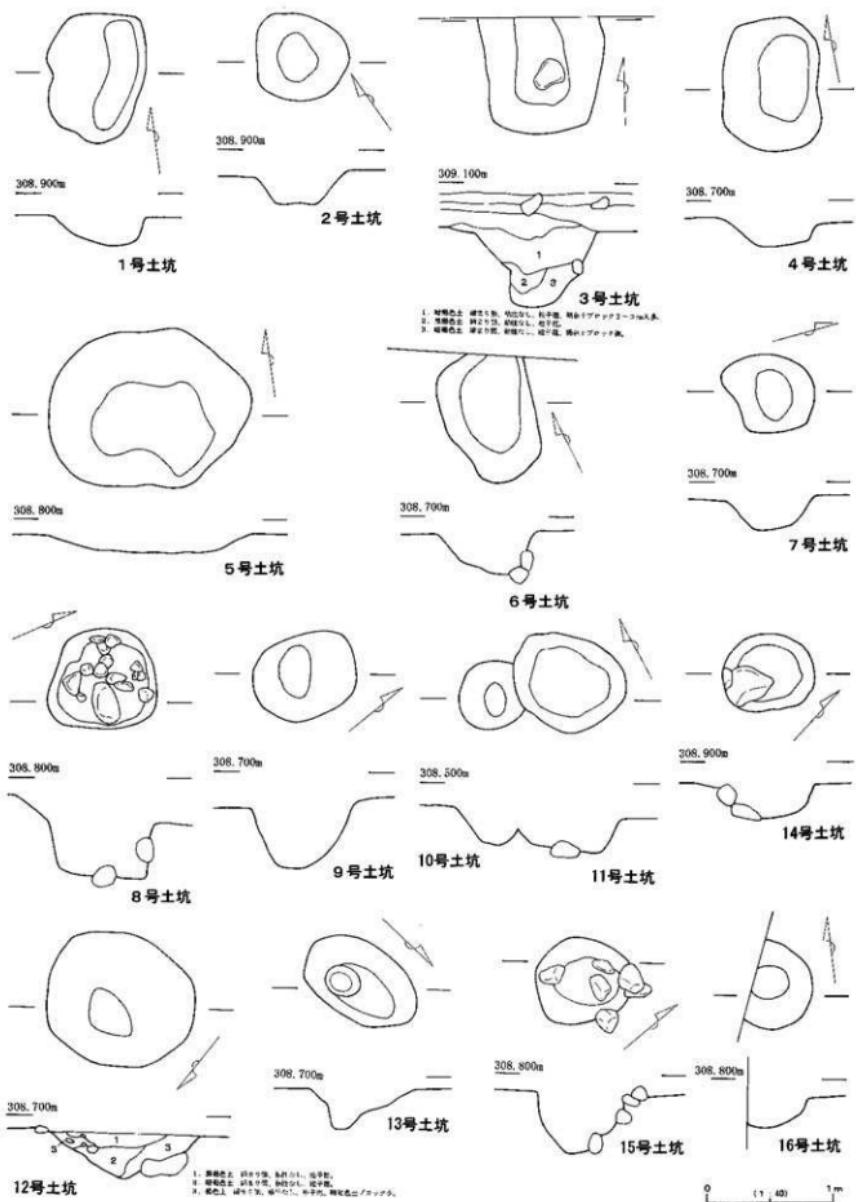
No.	グリッド	規模 (cm)			備考
		長軸	短軸	深さ	
P6	A-2	0.36	0.24	0.13	
P7	A-2	0.37	0.27	0.26	
P8	A-B-1	0.42	0.42	0.19	
P9	B-1	0.41	0.35	0.17	

第9表 ピット一覧

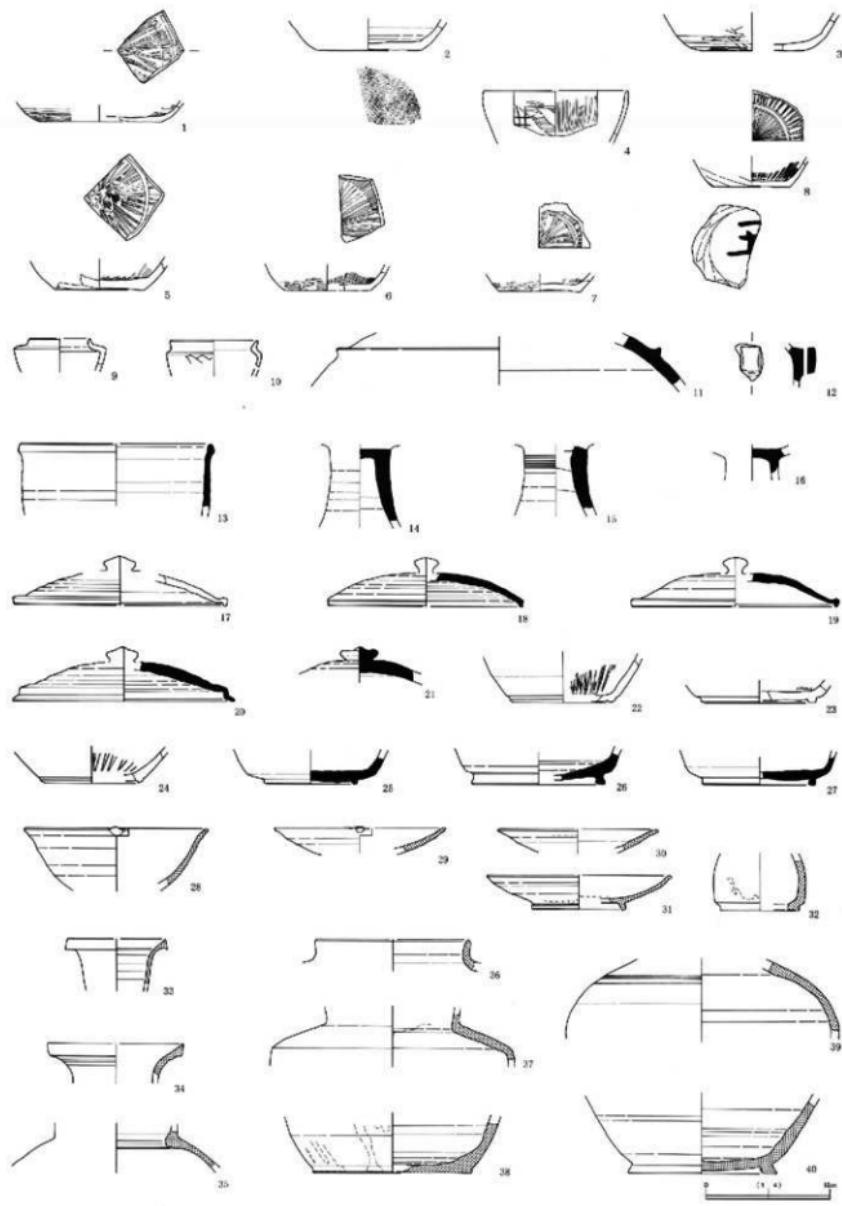
6 7



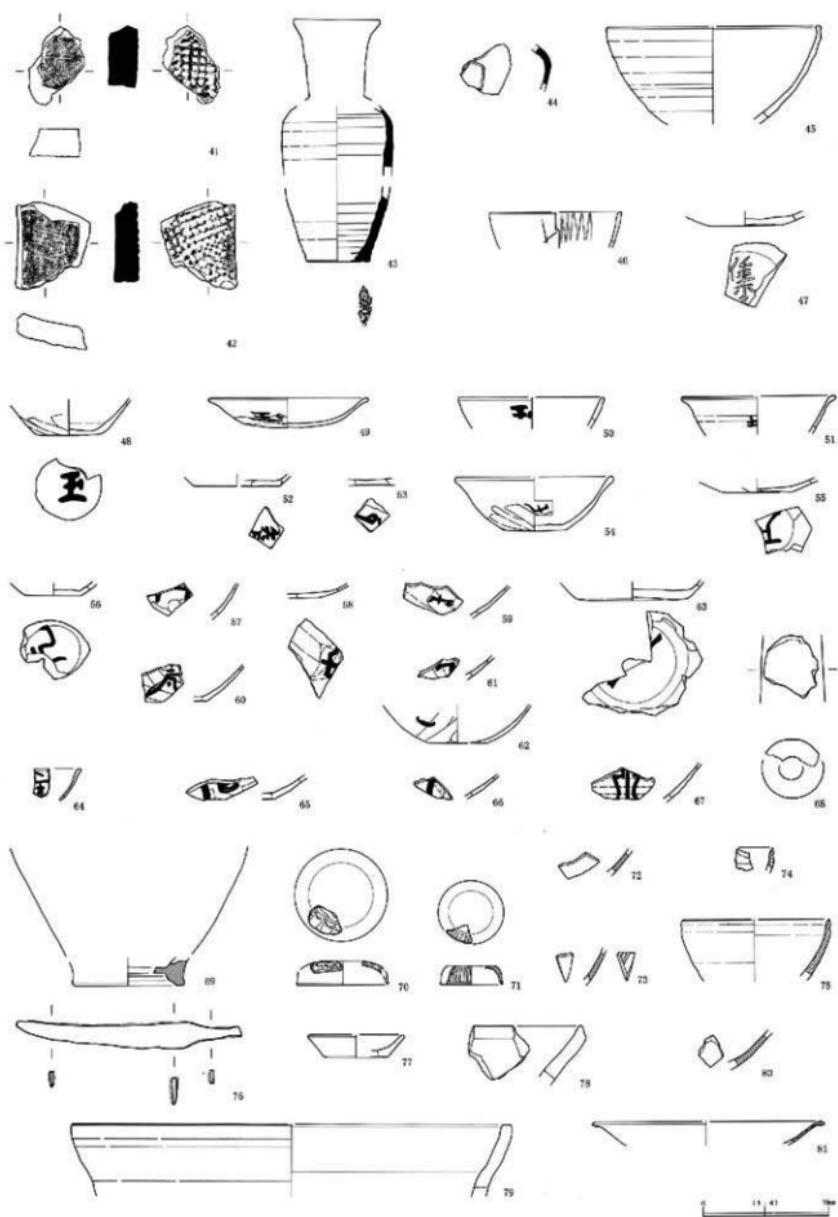
第20図 土坑・ピット分布図



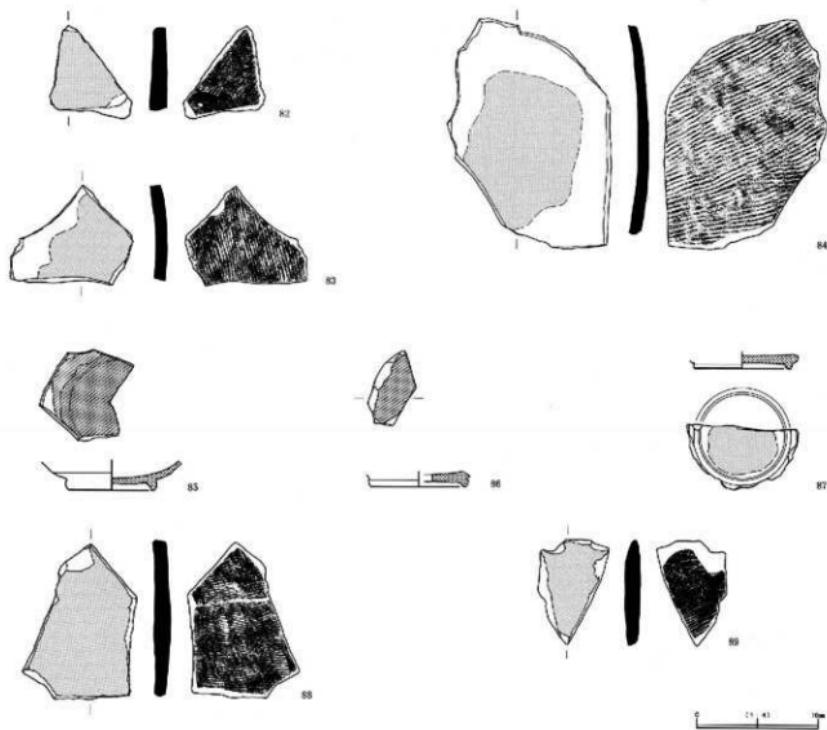
第21図 土坑



第22図 遺構外出土遺物（1）



第23図 遺構外出土遺物 (2)



第24図 遺構外出土遺物 (3)

No.	山上 地点	器種	器形	大きさ		胎土	色調	焼成	文様・調整・特徴	挿図
				高さ	口径					
第22遺1	A-3	土師器	片			(10.1)	灰、赤色粒子、赤石、金色雲母	黄褐色	火 外面撥方向の擦き、内面放射次文。	
第22遺2	A-6	土師器	片			(9.4)	灰、赤色粒子、赤石、金色雲母	棕褐色	火	
第22遺3	12号位	土師器	片			(8.2)	灰、赤色粒子、赤石	棕褐色	火 外面撲方向の擦き。	
第22遺4	29号位	土師器	片			(11.8)	灰、赤色粒子、赤石	棕褐色	火 外面撲書き、内面放射次文。	
第22遺5	17号位	土師器	片			(7.3)	灰、赤色粒子、赤石	棕褐色	火 内面放射次文。	
第22遺6	C-4	土師器	片			(7.2)	灰、赤色粒子、赤石、石英	棕褐色	火 外面磨き、内面放射次文。	
第22遺7	20号位	土師器	片			(6.6)	灰、赤色粒子、赤石	棕褐色	火 外面撲書き、内面放射次文。	
第22遺8	12号位	土師器	片			(6.4)	灰、長石、赤色粒子	棕褐色	火 外面体部下半へ削り、内面放射次文。	
第22遺9	1号位	土師器	萬葉	(4.9)		灰、赤色粒子、赤石、黑色雲母	棕褐色	火		
第22遺10	22号位	土師器	萬葉	(7.0)		灰、赤色粒子、赤石	棕褐色	火		
第22遺11	B-3	須恵器	凸輪盃			灰、赤色粒子、赤石、石英	灰白色	火		
第22遺12	C-3	須恵器	凸輪盃			灰、黑色粒子、赤石	黑褐色	火		
第22遺13	B-6	須恵器	鉢	(16.2)		中や暗、白、黑色粒子	黑褐色	火		
第22遺14	B-41	須恵器	鉢			灰、白色粒子、赤石、黑色雲母	灰褐色	火	刷毛。	
第22遺15	29号位	須恵器	萬葉			灰、白色粒子	灰白色	火	刷毛。	
第22遺16	B-2	須恵器	萬葉			灰、白、黑色粒子、赤石	灰褐色	火	刷毛。	
第22遺17	A-4	土師器	片	(17.3)		灰、長石、赤色粒子	棕褐色	火		
第22遺18	A-4	須恵器	萬葉	(16.8)		灰、白色粒子	棕褐色	火		
第22遺19	B-4	須恵器	萬葉	(16.4)		灰、白色粒子	黑褐色	火		
第22遺20	30号位	須恵器	萬葉	(17.8)		灰、白色粒子、赤石	灰褐色	火		
第22遺21	C-2	須恵器	萬葉			中や暗、白、黑色粒子	灰褐色	火		
第22遺22	A-4	土師器	高台片			(8.2)	灰、長石、赤色粒子	棕褐色	火 外面放射次文。	

第10表 遺構外出土の遺物一覧 (1)

No.	出土 所	器種	形態	大きさ 高さ 横幅	胎土	色調	焼成	文様・調整・特徴	挿因
第2222	1号地	土師器	高台形	(9.4)	赤、長石、赤色粒子	明褐色	白	内山道財状模文、前丸じき文。	
第2223	A - 4	土師器	高台形	(7.6)	今や形、茎石、赤色粒子	赤褐色	白	六面折財状模文、削り出し文。	
第2224	B - 2	土師器	高台形	(7.6)	白、白色粒子	灰褐色	白		
第2225	B - 2	土師器	高台形	(10.6)	白、白色粒子、茎石	灰褐色	白		
第2226	B - 2	土師器	高台形	(9.0)	白、白色粒子、茎石、小穴	灰褐色	白		
第2227	B - 2	土師器	高台形						
第2228	A - 4	土師器	壺	(14.8)	今や形、白色粒子	浅白色	白	輪花形。	
第2229	B - 4	土師器	壺	(13.8)	今や形、黑色粒子	浅白色	白	輪花形。	
第2230	B - 4	土師器	壺	(13.8)	今や形、赤色粒子	浅白色	白	成扇。	
第2231	B - 6	土師器	壺	2.9 (14.8) (7.4)	今や形、白色粒子	灰褐色	白		
第2232	C - 4	土師器	小口壺	(6.4)	今や形、白色粒子	浅白色	白		
第2233	B - 5	土師器	壺	(8.0)	今や形、黑色粒子	灰褐色	白		
第2234	B - 3	土師器	豆皿	(11.0)	今や形、黑色粒子	灰褐色	白		
第2235	B - 3	土師器	壺		今や形、黑色粒子	灰褐色	白		
第2236	B - 3	土師器	壺		今や形、黑色粒子	灰褐色	白		
第2237	B - 3	土師器	壺	(12.4)	今や形、黑色粒子	灰褐色	白		
第2238	B - 3	土師器	壺		今や形、黑色粒子	灰褐色	白		
第2239	B - 3	土師器	壺		今や形、黑色粒子	灰褐色	白		
第2240	5号地	土師器	壺	(11.0)	今や形、黑色粒子	灰褐色	白		
第2241	5号地	土師器	壺		今や形、黑色粒子	灰褐色	白		
第2242	5号地	土師器	壺		今や形、黑色粒子	灰褐色	白		
第2243	B - 3	土師器	壺		今や形、黑色粒子	灰褐色	白		
第2244	B - 3	土師器	壺		今や形、黑色粒子	灰褐色	白		
第2245	B - 3	土師器	壺		今や形、黑色粒子	灰褐色	白		
第2246	C - 4	土師器	壺	(10.6)	今や形、黑色粒子	灰褐色	白		
第2247	C - 6	土師器	壺		今や形、黑色粒子	灰褐色	白		
第2248	E - 3	土師器	壺		今や形、黑色粒子	灰褐色	白		
第2249	B - 2	土師器	壺	2.5 (12.8)	今や形、赤色粒子、茎石	灰褐色	白		
第2250	Y - 2	土師器	壺	1.9 (11.8)	今や形、赤色粒子、茎石	灰褐色	白		
第2251	B - 2	土師器	壺	(11.2)	今や形、赤色粒子、茎石	灰褐色	白		
第2252	B - 2	土師器	壺		今や形、赤色粒子、茎石	灰褐色	白		
第2253	B - 2	土師器	壺		今や形、赤色粒子、茎石	灰褐色	白		
第2254	B - 2	土師器	壺		今や形、赤色粒子、茎石	灰褐色	白		
第2255	C - 3	土師器	壺	(5.6)	今や形、茎石、白色粒子	浅褐色	白	神社印文の「ノ」字記と状文。	
第2256	7号地	土師器	壺		今や形、茎石、白色粒子	浅褐色	白	神社印文の「ノ」字記と状文。	
第2257	23号地	土師器	壺		今や形、茎石、白色粒子	浅褐色	白	外面部左側へ2割り、内面部右側。	
第2258	23号地	土師器	壺		今や形、茎石、白色粒子	浅褐色	白	外面部左側へ2割り、内面部右側。	
第2259	C - 4	土師器	壺		今や形、茎石、白色粒子	浅褐色	白	外面部左側へ2割り、内面部右側。	
第2260	D - 2	土師器	壺		今や形、茎石、白色粒子	浅褐色	白	外面部左側へ2割り、内面部右側。	
第2261	23号地	土師器	壺		今や形、茎石、白色粒子	浅褐色	白	外面部左側へ2割り、内面部右側。	
第2262	S - 10	土師器	壺	(4.8) (19.3) (8.1)	今や形、茎石、白色粒子	浅褐色	白	外山道財状模文、丁字型。	
第2263	C - 5	土師器	壺		今や形、茎石、白色粒子	浅褐色	白	外面部左側へ2割り、内面部右側。	
第2264	F - 2	土師器	壺		今や形、茎石、白色粒子	浅褐色	白	外面部左側へ2割り、内面部右側。	
第2265	D - 4	土師器	壺		今や形、茎石、白色粒子	浅褐色	白	外面部左側へ2割り、内面部右側。	
第2266	B - 2	土師器	壺		今や形、茎石、白色粒子	浅褐色	白	外面部左側へ2割り、内面部右側。	
第2267	D - 2	土師器	壺		今や形、茎石、白色粒子	浅褐色	白	外面部左側へ2割り、内面部右側。	
第2268	A - 2	土師器	ワゴン型		球、白、白色粒子	深褐色	白	外面部左側へ2割り、内面部右側。	
第2269	B - 1	白瓶			球、黑色粒子	灰白色	白	白球2点式、「瓜割り」か?	
第2270	A - 6	青白瓶	合子型		球、青白粒子	灰褐色	白	12世紀後。	
第2271	A - 1	青白瓶	合子型		今や形、青白粒子	灰白色	白	12世紀後。	
第2272	B - 4	白瓶			球、白色粒子	灰褐色	白	白細口、12世紀後。	
第2273	B - 4	白瓶			球、白色粒子	灰褐色	白	白細口、12世紀後。	
第2274	C - 5	瓦足			球、白色粒子	灰褐色	白	輪郭狀花文、12世紀後。	
第2275	C - 5	瓦足	高脚	(4.6) (11.8)	球、黑色粒子	深褐色	白	13世紀後、中期。	
第2276	C - 4	瓦足	刀子		球、白色粒子	深褐色	白	13世紀後、中期。	
第2277	C - 5	土器	かわら口	(9.9) (7.6) (6.4)	球、瓦石、黑色粒子	青褐色	白	淡青5.4cm、幅2.2cm、厚0.4cm	
第2278	C - 4	土器	團體		球、瓦石、黑色、白色混合	灰褐色	白	淡青5.2cm、幅2.1cm、厚0.3cm	
第2279	瓦足	内互聯		(34.4)	球、瓦石、白色粒子	青褐色	白	淡青5.2cm、幅2.1cm、厚0.3cm	
第2280	C - 5	青白	碗		球、青白粒子	灰褐色	白	輪郭狀花文、12世紀後。	

第11表 遺構外出土の遺物一覧 (2)

No.	出土 場所	器種	形態	大きさ (cm)			胎土	色調	焼成	文様・調査・特徴	備註
				最大高	最大幅	最大厚					
第4-482	八一戸	須恵器	環狀布紋罐	(9.0)	(5.4)	1.4	褐、白色粒子	墨灰色	直	破片、内面に磨擦。	
第4-483	A-1	須恵器	環狀布紋罐	(9.0)	(5.4)	1.0	白、黑色粒子	青灰色	直	破片、内面に磨擦。	
第4-484	B-2	須恵器	環狀布紋罐	(9.0)	(5.4)	1.0	白、黑色粒子	青灰色	直	破片、内面に磨擦。	
第4-485	B-2	須恵器	環狀布紋罐	(9.0)	(5.4)	1.0	白、黑色粒子	青灰色	直	一大割れ、内面に磨擦。	
第4-486	B-3	須恵器	環狀布紋罐	(6.4)	(4.6)	0.9	白、黑色粒子	青灰色	直	破片、内面に磨擦。	
第4-487	C-2	須恵器	環狀布紋罐	(6.4)	(4.3)	0.9	白、黑色粒子	青灰色	直	破片、内面に磨擦。	
第4-488	C-2	須恵器	環狀布紋罐	(6.5)	(4.5)	0.7	白、黑色粒子	青灰色	直	破片、内面に磨擦。	
第4-489	C-2	須恵器	環狀布紋罐	(12.9)	(8.8)	1.4	石灰、白色粒子	墨灰色	直	内面に磨擦。	
第4-490	C-2	須恵器	環狀布紋罐	(7.7)	(6.3)	1.3	白、黑色粒子	青灰色	直	内面に磨擦。	

第12表 遺構外出土の遺物一覧 (3)

第3章 村続遺跡出土瓦の胎土分析

はじめに

村続遺跡は、荒川扇状地の扇央部に位置する遺跡である。本遺跡西方の台地は、黒富士火山の山麓斜面下部と荒川の河岸段丘面とから構成される。この台地上には白鳳期の天狗沢瓦窯跡があり、瓦・須恵器などの生産が発掘調査によって確認され、瓦の一部が胎土分析されている（河西、1990）。しかし、天狗沢瓦窯跡から生産された瓦の供給先については、現在のところ不明である。なお塩川の谷底平野「藤井平」に分布する藤崎市宮ノ前第2遺跡では、奈良時代の瓦が多量に出土し、胎土分析によってデイサイト・安山岩が多く塩川・荒川地域に産地が推定される瓦と花崗岩類が多く釜無川・荒川・塩川地域に産地が推定される瓦とが明らかになった（河西、1991）。今回村続遺跡の堆積層から瓦の破片が少数出土した。ここでは、瓦の胎土組成を明らかにし、松ノ尾遺跡や天狗沢瓦窯跡の分析結果との比較などによって瓦の産地推定を試みる。

試料および分析方法

土器試料は、凸面が格子叩き目跡があり、凹面は布目跡が残る平瓦片である（第1・2図）。以下の方法で薄片を作製した。土器試料は、切断機で3×2.5 cm程度の大きさに切断し、残りの試料は保存した。土器片試料はエボキシ樹脂を含浸させて補強し、土器の器壁に直交する断面切片を切り、岩石薄片と同じ要領で薄片を作製した。さらにフッ化水素酸蒸気でエッティングし、コバルチ亞硝酸ナトリウム飽和溶液に浸してカリ長石を黄色に染色しプレパラートとした。次に以下の方法で岩石鉱物成分のモード分析を行なった。偏光顕微鏡下において、ポイントカウンタ用い、ステージの移動ピッチを薄片長辺方向に0.33 mm、短辺方向に0.40 mmとし、各薄片で2,000ポイントを計測する。計数対象は、粒径0.05 mm以上の岩石鉱物粒子、およびこれより細粒のマトリクス（「粘土」）部分とし、植物珪酸体はすべてマトリクスに含める。

分析結果

分析結果を第1表に示す。試料全体の砂粒子・赤褐色粒子・マトリクスの割合（粒子構成）、および砂粒子の岩石鉱物組成および重鉱物組成を第3図に示す。重鉱物組成では右側に基数を表示した。岩石組成折れ線グラフを第4図に示す。この折れ線グラフは、各岩石のポイント総数を基数とし、各岩石の構成比を示したものである。クラスター分析の樹形図を第5図に示す。クラスター分析は、折れ線グラフと同様の10種の岩石データを用いて行なった。クラスター分析での非類似度は、ユークリッド平方距離を用い、最短距離法によって算出した。第5図は、本遺跡試料のほか、村続遺跡出土瓦、天狗沢瓦窯跡、宮ノ前第2遺跡の胎土分析結果、および甲府盆地周辺地域の河川砂の岩石組成とを比較し、便宜的に1~14の番号をクラスターに付した。

粒子構成では、砂粒子の割合が11.1%で、赤褐色粒子が4.7%を示す。岩石鉱物組成では、斜長石が54%と卓越し、石英・カリ長石なども多く、デイサイト・花崗岩類・変質火山岩類などがこれに続くが、岩石の割合は低率である。デイサイトの石基は細粒である。重鉱物組成では、酸化角閃石が最も多く、角閃石・不透明鉱物・单斜輝石が検出された。第5図では松ノ尾遺跡No.1・天狗沢瓦窯跡TNG-A・宮ノ前第2遺跡No.15・貢川河川砂試料などとともにクラスター8を形成している。デイサイト・花崗岩類などから主として構成される組成は、貢川・荒川流域の特徴であり、酸化角閃石が優勢な重鉱物組成もこの地域の特徴と一致することから、本試料は在地の土器といえる。

瓦の産地推定

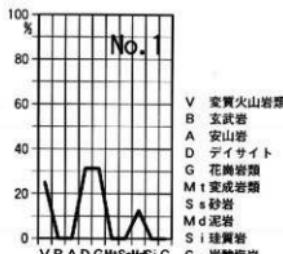
以上の分析結果において本遺跡試料と天狗沢瓦窯跡TNG-Aとの類似性が認められることから天狗沢瓦窯跡で本遺跡瓦が生産された可能性が存在する。ただしTNG-Aを除く天狗沢瓦窯跡出土瓦の多くは、花崗岩類の優占率がより高率で、第4図では荒川河川砂試料とともにクラスター6を構成している。村続遺跡試料が、天狗沢瓦窯跡出土の典型的な胎土組成を示しているとはいはず、天狗沢瓦窯跡以外の生産地に由来しての可能性も低くない。また村続遺跡試料は、宮ノ前第2遺跡No.15との類似性が認められる。宮ノ前第2遺跡



第1図 分析試料写真(凸面)



第2図 分析試料写真(凹面)

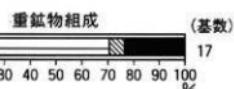
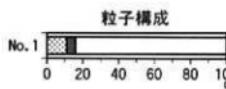


第4図 岩石組成折線グラフ

第1表 土器胎土中の岩石鉱物
(数字はポイント数を、+は計数以外の検出を示す)

試料番号	No. 1
石英-单結晶	25
石英-多結晶	4
カリ長石	11
斜長石	120
角閃石	4
酸化角閃石	8
單斜輝石	1
不透明鉱物	4
デイサイト	5
変質火山岩類	4
花崗岩類	5
泥岩	2
火山ガラス-無色	2
変質鉱物	5
泥質 フロック	21
赤褐色粒子	94
マトリクス	1685
合計	2000
石英波動消光	+
バーサイト	+
変質火山岩類質	AD, D
火山ガラス形態	B
植物珪酸体	+

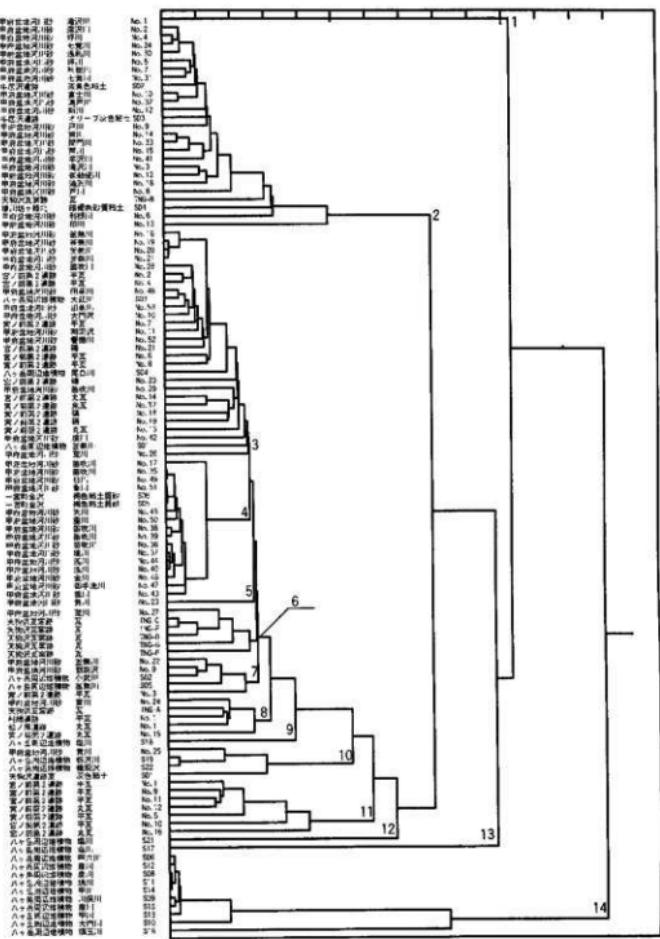
変質火山岩類：AD安山岩質～デイサイト質、Dデイサイト質。火山ガラス形態：B塊状



第3図 土器胎土の岩石鉱物組成

では、多様な胎土組成の存在から周辺地質の複雑さによる原料組成の多様性があるあるいは複数産地の存在の可能性などが指摘されている。No.15を除く他の宮ノ前第2遺跡試料は、クラスター3およびクラスター11に集中する傾向があり、天狗沢瓦窯跡や村統・松ノ尾遺跡試料とも区別される。以上のように黒富士火山周辺の荒川および塩川流域の古墳時代後期～平安期瓦を出土する遺跡における胎土分析結果からは、多様な産地の存在が考えられる。荒川扇状地地域においても村統遺跡瓦の産地が存在する可能性も少なくはない。

村統遺跡・松ノ尾遺跡では、遺跡を埋積する堆積物中から瓦小片が出土していることから、さらに上流部でより多くの瓦を出土するような遺跡の存在が期待される。今後の資料の蓄積を待って瓦産地について再検討する必要があろう。



第5図 土器のクラスター分析樹形図

まとめ

村続遺跡出土瓦は、胎土組成が天狗沢瓦窯跡試料と類似することから、天狗沢瓦窯跡で生産された可能性が存在すること、しかしそれ以外の荒川扇状地周辺の生産地に由来してする可能性も低くないことが明らかになった。

(山梨文化財研究所 河西 学)

文献

- 河西学(1990)岩石学的手法による天狗沢瓦窯跡瓦の胎土分析。『天狗沢瓦窯跡』、敷島町教育委員会、106-114。
河西学(1991)宮ノ前第2遺跡出土瓦の胎土分析。『宮ノ前第2遺跡・北堂地遺跡』、蘿崎市教育委員会、84-90。

第4章 まとめ

今回の調査で奈良・平安時代の住居跡計36軒が確認された。各住居跡内より出土した遺物から、8世紀後半から12世紀代にかけて、約450年間の長期にわたりほぼ継続する集落が営まれていたことが明らかとなつた。以下は、発見された時期ごとの軒数をまとめたものである。

8世紀前半 遺構外および住居跡覆土中に混ざり遺物が出上。

8世紀後半(2軒) 27号住(新)、28号住(古)

9世紀前半(3軒) 2号住、20号住、33号住

9世紀後半(4軒) 3号住、4号住、8号住、31号住

10世紀前半(12軒) 5号住、7号住、9号住、11号住、21~24号住、26号住、29号住、32号住、34号住

10世紀後半(6軒) 1号住、13号住、18号住、25号住、30号住、36号住

11世紀前半(2軒) 6号住、17号住

11世紀後半(2軒) 12号住、16号住

12世紀前半(1軒) 14号住

12世紀後半(2軒) 15号住、19号住

時期不明(2軒) 35号住、37号住

《 遺構について 》

今回発見された遺構は奈良～平安時代にわたる住居跡36軒と土坑19基、ピット14箇所である。

36軒の住居跡は調査範囲内で全面にわたって確認されている。調査区B・Cでは住居跡が複雑に重なり合い両調査区の全面が遺構の覆土で満たされた状態であった。全体的に東側へと向かうに従い遺構の密度が高くなる傾向にあり、集落の本体が東側に存在する可能性が見受けられる。

発見された住居跡27・28号は時期的には8世紀後半から末葉にあたるとみられるが、この後10世紀前半までの間は調査区のはば東半部にかけて住居跡が重複しながら偏在する傾向にある。

しかし、10世紀後半以降になるとその傾向はほとんどみられなくなり、調査区A～Cの全体に散在し、12世紀代には逆に調査区Aの南西へと住居跡14・15・19号がまとまって検出された。

各住居跡のカマドについてみていくたい。36軒中19軒で確認された。このうち、北カマドは4軒、東カマドは12軒、南東カマドは3軒であった。

時期別には、8世紀後半(27・28号住)2軒中1軒東カマド、9世紀前半(2・20・33号住)3軒中2軒いずれも東カマド、9世紀後半(3・4・8・31号住)4軒中3軒北カマド2軒と東カマド1軒、10世紀前半(5・7・9・11・21・22・23・24・26・29・32・34号住)12軒中6軒東カマド4軒と北カマド2軒、10世紀後半(1・13・18・25・30・36号住)6軒中5軒東カマド4軒と南東カマド1軒、11世紀前半(6・17号住)2軒中2軒北カマド1軒と南東カマド1軒、11世紀後半(12・16号住)2軒中2軒東カマド1軒と南東カマド1軒、12世紀前半(14号住)1軒中1軒南東カマド1軒、12世紀後半(15・19号住)2軒中1軒北カマド1軒が確認されている。

カマドの時期的な変遷を概観すると、住居跡の北と東壁に設けられるものは8・9世紀代から一般的にみられるが、10世紀後半以降になると南東隅部に造られるものが出でてくるようになる。

また、遺構の重複によって判別しにくいものもあるが、9世紀後半～10世紀前半頃を境として、それまでカマドの用材には両袖にそれぞれ1つの袖石と場合によって天井石を設けた簡素な造りであったものが、この時期を契機として拳大から人頭大ほどの石を数多く使い両袖部を整然と積み上げ強固に仕上げたカマドが多くみられるようになる。

さらに、本遺跡から発見された住居跡は比較的遺存状態が良好であったことから、36軒中11軒の住居跡で固く踏み締めた土間状の床面が確認されており、このような床面は基本的に住居跡の中央からカマドの正面に向かって観察されるものが多かった。

《 遺物について 》

今回紙面の都合上、掲載しなかったが縄文、弥生、古墳時代前期の土器がわずかに出土している。

調査では、古墳時代中・後期の遺物は全くみられなく、奈良時代の8世紀代になると遺構外遺物第22図1~10のような、盤状坏や見込み部から内面体部にかけて放射状暗文を施す坏類などが遺構内外から数多く出土した。今回、調査された遺構で古いものは8世紀後半~末頃の住居跡が発見されたに留まつたが、出土遺物からみて本集落跡は8世紀代でも早い段階から營まれていたことが推測される。

また、特筆される遺物には瓦、綠釉陶器、長頸壺（巻G）、貿易陶磁器、転用硯、銅製小仏像などがある。

瓦 女瓦2点で調査区Aの中央北側のA-3、B-3グリッドからそれぞれ1点出土した。表面に格子目状の叩き目、裏面に布目が観察されるもので、本町の天狗沢瓦窯跡の瓦と類似したものである。天狗沢瓦窯は7世紀後半とみられており、山梨県内でも最古の瓦窯跡であるが、未だその瓦がどこへ運ばれ使用されたのかは謎である。今回わずか2点の瓦片の出土であったが、周辺に古代の寺院跡が存在することを示唆する資料として大変注目される。

綠釉陶器（巻頭カラー） どれも破片であったが計54点が出土し、碗、皿を中心でおそらく袋物となるものが1点ある。6、12、26、28号住の覆土中から各1点づつ破片が出土しているが、確実に遺構に伴うものではなく、この4点以外はすべて遺構外からの出土であった。なお、これら綠釉陶器の産地は近江、猿投、東濃産に大別できるようで、中でも東濃産が主体を占めている（註1）。

長頸壺 遺構外出土の43・44は、およそ8世紀後半~9世紀前半のメルクマールとなる「壺G」と呼ばれるもので、A-1・6、B-1・3グリッドや12号住居跡覆土中などから破片が散在し出土している。これは仏教関連の遺物とみられるものであるが、その他薬壺（遺外9・10）や鉢形状の土器（遺外45）などの出土もみられ、本遺跡の性格を今後検討していく上で興味深いものである。

硯 計20点の須恵器や灰釉陶器などを再利用した「転用硯」が出土している。

遺構内からは、4号住1点、8号住3点、9号住1点、13号住1点、17号住2点、20号住1点、25号住1点、26または27号住1点、32号住1点の計12点がある。

遺構外からは8点が認められ、B-2グリッド2点、B-3グリッド1点、C-2グリッド1点、C-2・4グリッド各1点（接合）、A-6グリッド2点、試掘で1点が出土している。

これらの転用硯は、須恵器の大型破片の内面や灰釉陶器の底部（見込み部）が使われ、主に中央部がよく擦られているものが多く、光沢が現れているものもみられる。また、全体の形を整えるためにその周縁部を丁寧に打ち削いて整形したもの（0806、0910、1308、1709など）もある。

今回、朱墨痕のみられる転用硯も確認されており、須恵器片で20号住出土2005や遺構外出土の灰釉陶器の見込み部を使用した底部片（遺構外85・86）などがある。しかし、出土した墨書き土器やその他の遺物を含め観察しても朱墨で記載されたようなものは認められない。

転用硯の時期は、今回遺構の重複が激しく判断し難い部分もあるが、9世紀代の住居跡（4・8・20号住など）で出土が目立ち、確実に新しいものは13号住居跡（10世紀後半）に伴っている。

貿易陶磁器 白磁・青白磁・青磁の計10点が出土し細片であったが、大きくは平安時代後半~末葉、中世初頭、中世後半期にそれぞれ相当するものがある。内訳は以下のとおりである。

白磁	X I類	10世紀後半~11世紀中頃	皿片1点	12号住居跡
白磁壺	2系	11世紀中葉~11世紀後半	壺（薬壺？）片1点	遺構外
青白磁		12世紀代	合子蓋片2点	遺構外
V類		12世紀前半~13世紀前半	碗片1点	遺構外

青磁碗（劃花文）	12世紀後半～13世紀前半	碗片1点	遺構外
天目茶碗（中国）	13世紀代	碗片2点	遺構外
青磁（無文）	13世紀以降	碗片1点	遺構外
白磁	15世紀末～16世紀初頭	皿片1点	遺構外 計10点

これら10点のうち、12号住居跡の白磁皿1213は唯一遺構内から出土したものである。この白磁皿1213は、白磁分類でいうXⅠ類（10世紀後半～11世紀中頃）に相当するとみられる（註2）。

12号住居跡は土師質土器の小皿、壺、小桶などから11世紀中葉～後年にあたるが、覆土中からは8世紀代の杯類をはじめとする上器類や須恵器、灰釉陶器などの破片も出ている。しかし、時期決定となった資料に比べてさらに新しいとみられる時期の遺物は混在していなかった。

本住居跡出土の土師質土器群と白磁皿1213の時期では若干のズレが生じているが、東国という遠方の地まで運ばれてくる過程で生じたズレであったのか、もしくは今回の調査区にみられる遺構の検出状況からも明らかのように12号住居跡周辺でさらに古い時期の遺構が重複により破壊されたことから遺物が散在し、本住居跡の埋没時に白磁皿1213が混ざった可能性なども考えられる。

なお、白磁皿1213は現状県内で遺構内から出土した中では、最も古い時期の白磁とみられる。

銅製小仏像 14号住居跡内の北側にあり、ほぼ床面上からの出土である（第7図）。本住居跡は、確認段階ですでにかなり浅い掘り込みであったが、良好な遺物が出ていている。北西部から土師質土器の小皿、耳皿、柱状高台小皿が、南東部の壁に近い場所からは小桶が出土したため、これらの土器から本住居跡は12世紀前半と考えられ、その出土状態から銅製小仏像は該期のものと推測される（註3）。

以上みてきたように、村続遺跡は8世紀後半～12世紀代まで連綿と継続する拠点的な集落跡であったことが確認できた。そして、古くはすでに8世紀代の早い段階から営まれていた可能性も遺構内外の出土遺物から指摘できる。また、調査面積に比べて遺物には朱墨痕を含んだ多くの転用窯の出土や豊富な綠釉陶器の消費、薬壺、壺G、灰釉小瓶、白磁、銅製小仏像の出土など一般集落とは異なる多種多様な遺物が各時期にわたって存在することから、本遺跡の特殊性が窺える。

古代甲斐国は、奈良時代にはすでに「山梨郡」「八代郡」「巨麻郡」「都留郡」の四郡に分かれていたようであるが、この村続遺跡が所在する敷島町域は当時の「巨麻郡」に所属していた。

「巨麻郡」は、9つの郷が存在しその比定地は複数の説があり未だ推定の域を出ておらず、また郡家となる郷名がみられないため、中枢となる郡衙跡地についても未だ明らかとなっていない。

巨麻郡における本遺跡の位置付けについて、遺跡の性格を吟味するには現状未だわずかな検討材料しかないため、今後本遺跡内で新たな調査を進める過程で不足を補いさらに検討していただきたい。

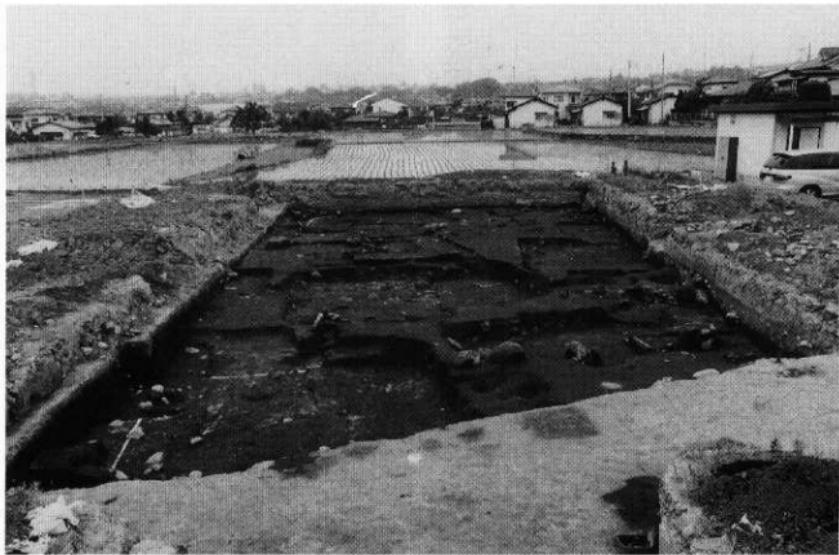
（註1）京都市埋蔵文化財研究所百瀬正恒氏の御教示による。

（註2）福岡県福岡市教育委員会大庭康時氏、京都市埋蔵文化財研究所百瀬正恒氏の御教示による。

（註3）仏像の詳細については、大島正之 2001「埋蔵文化財試掘年報'01」敷島町教育委員会を参照。

引用・参考文献

- 大宰府市教育委員会 2000『大宰府糸跡XV -陶磁器分類編-』 太宰府市の文化財 第49集
- 齊藤孝正 2000『日本の美術6』No.410 文化庁／東京国立博物館／京都国立博物館／奈良国立博物館
- 平野 修 他 2002『大坪跡道-平成12年度調査地点の報告-』 大坪跡発掘調査会
- 大島正之 2001『埋蔵文化財試掘年報'01』 敷島町教育委員会
- 平野 修 他 2002『宮ノ前道路』 菲崎市教育委員会・宮ノ前道路発掘調査会ほか
- 山梨県史編纂委員会 1998『山梨県史 資料編2』 山梨県



1. 調査区全景



2. 1号住居跡



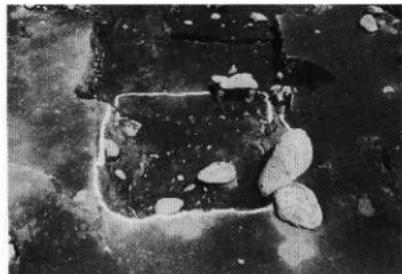
3. 4号住居跡



4. 2号住居跡



5. 2号住居跡力マド



1. 3号住居跡



2. 3号住居跡カマド



3. 5号住居跡



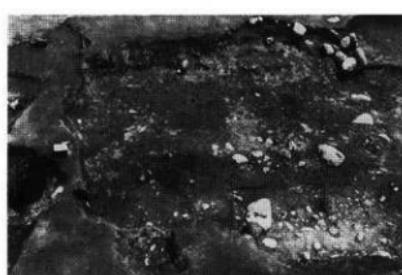
4. 5号住居跡カマド



5. 6号住居跡



6. 6号住居跡カマド



7. 8号住居跡



8. 8号住居跡カマド



1. 9号住居跡



2. 11号住居跡



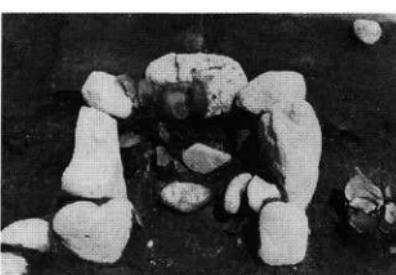
3. 12号住居跡



4. 12号住居跡カマド



5. 13号住居跡



6. 13号住居跡カマド



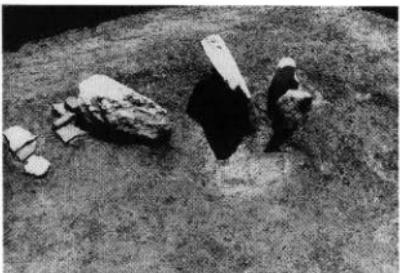
7. 14号住居跡



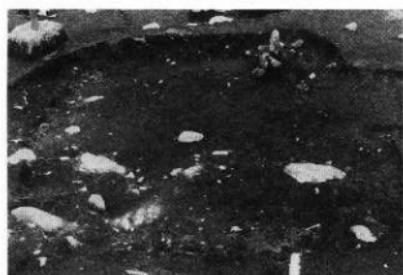
8. 14号住居跡 -小仏像台座出土状況-



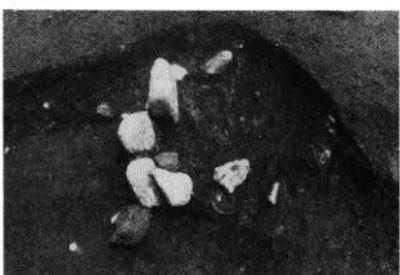
1. 17号住居跡



2. 17号住居跡カマド



3. 18号住居跡



4. 18号住居跡カマド



5. 19号住居跡



6. 20号住居跡



7. 22・23号住居跡



8. 22号住居跡カマド



1. 21号住居跡



2. 25号住居跡



3. 25号住居跡カマド



4. 25号住居跡 一床面遺物出土状態-



5. 26~28号住居跡



6. 26・27号住居跡カマド



7. 27・28・33・34号住居跡



8. 27号住居跡カマド



1. 29~31・36号住居跡



2. 30号住居跡カマド



3. 31号住居跡



4. 31号住居跡カマド



5. 31号住居跡カマド断面



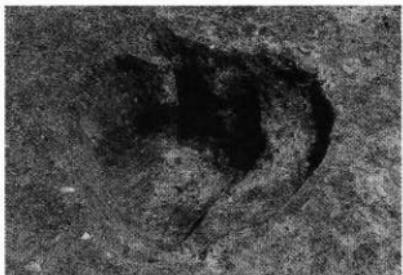
6. 32号住居跡



7. 35~37住居跡



8. 36号住居跡カマド



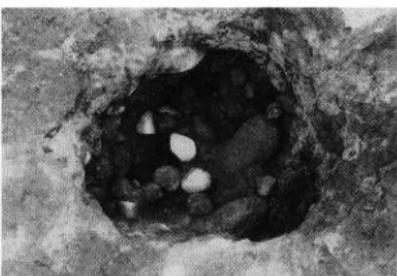
1. 2号土坑



2. 3号土坑



3. 6号土坑



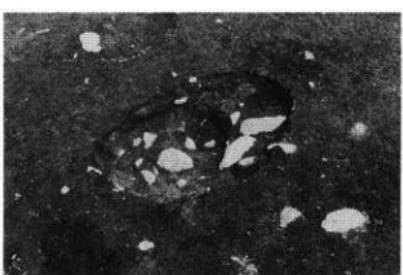
4. 8号土坑



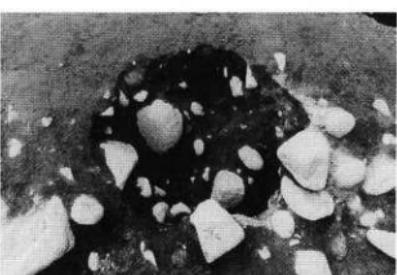
5. 9号土坑



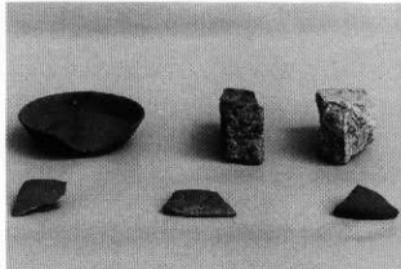
6. 12号土坑



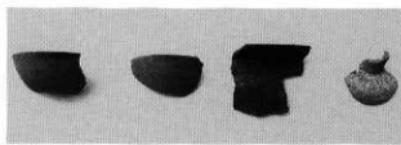
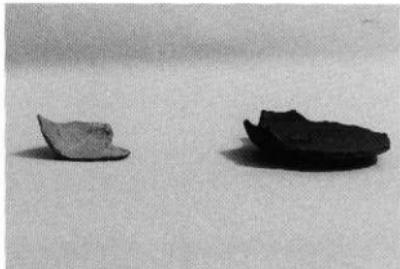
7. 13号土坑



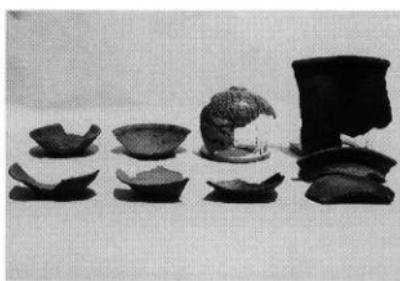
8. 15号土坑



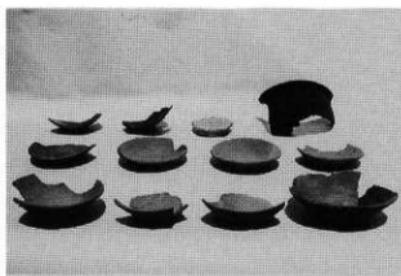
1. 8c後半～8c末葉の遺物



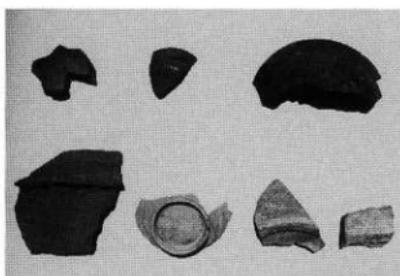
(20・31号住)



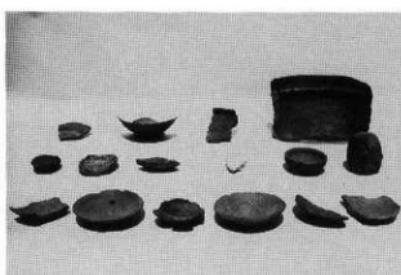
(9・26号住)



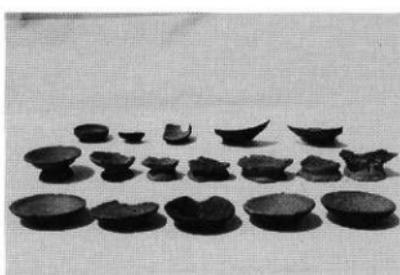
(13・18号住)



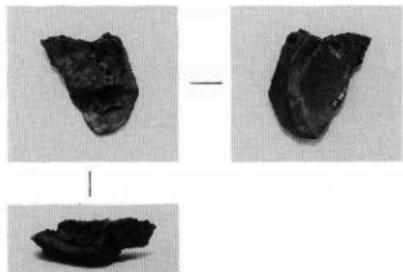
(17号住)



(12号住)



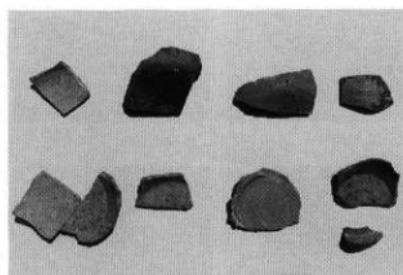
(14・15・19号住)



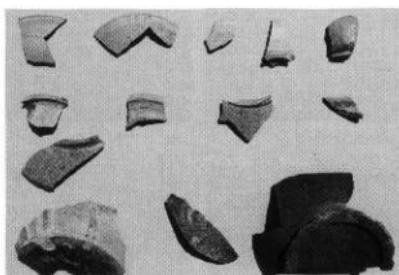
1. 高台杯転用の埴壺片 (3号住)



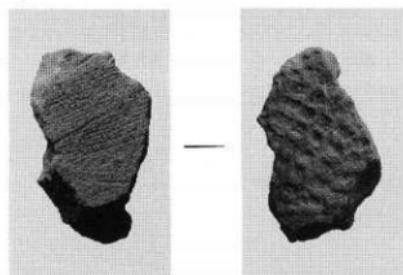
2. 鉄製品と羽口 (25号住)



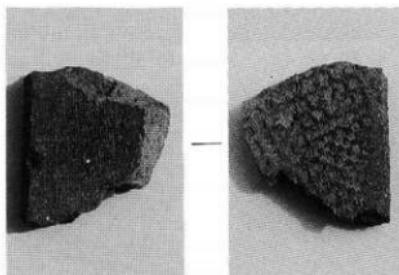
3. 8c代の壺 (遺外 1~9)



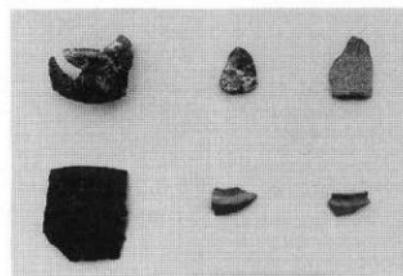
4. 灰釉陶器 (遺外 28~40)



5. 瓦 (遺外 41)



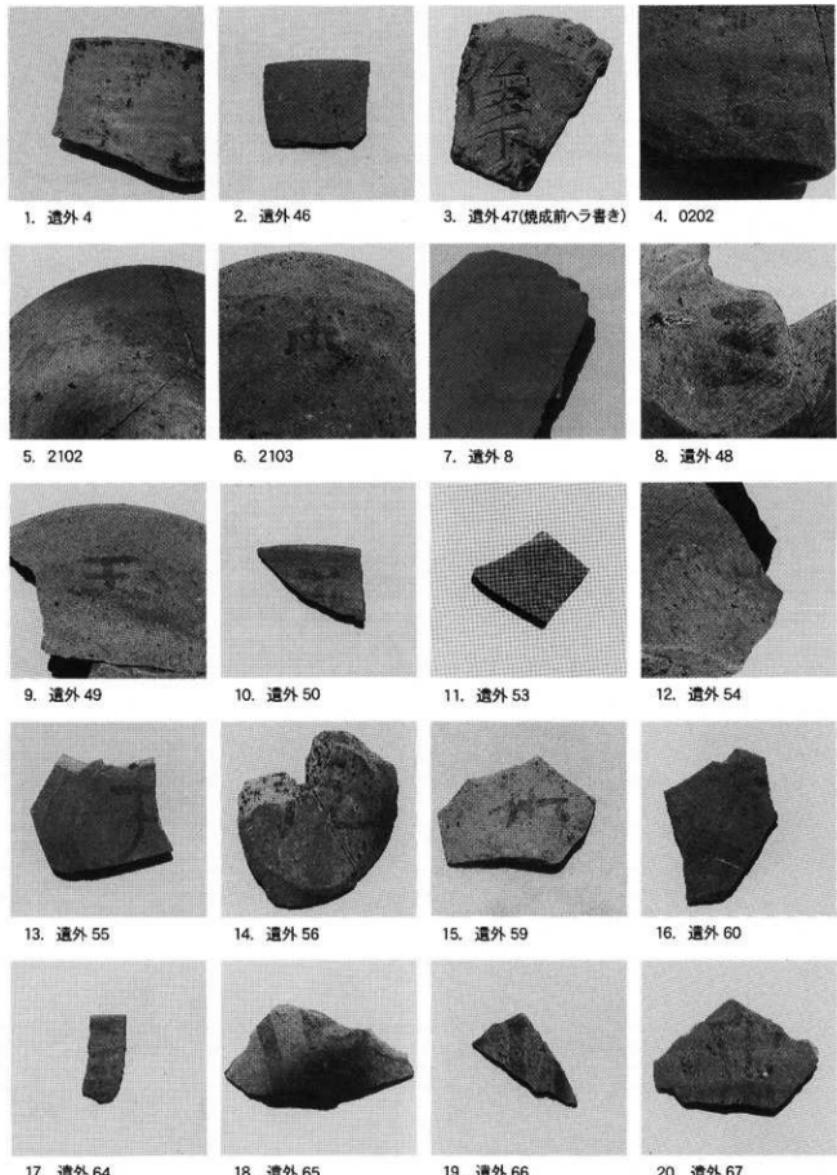
6. 瓦 (遺外 42)



5. 壺 G・鉢・薬壺



6. 遺構内外出土の転用壺



墨書土器

報告書抄録

ふりがな	むらつづき いせき							
書名	村続遺跡 I 次							
副書名								
巻次	21							
シリーズ名	敷島町文化財調査報告書							
シリーズ番号								
編著者名	小坂 隆司 河西 学(第3章)							
編集機関	敷島町教育委員会							
所在地	〒400-0123 山梨県中巨摩郡敷島町島上条1020							
発行年月日	2004年4月20日							
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
むらつづきいせき 村続遺跡	市町村 山梨県 中巨摩郡 敷島町島上 条 351-1 外	193828	43	度分秒	度分秒	平成13年 4月9日～ 平成13年 6月8日	320	店舗建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
村続遺跡	集落跡	奈良時代 平安時代	住居跡 土坑 ピット	土師器 須恵器 陶磁器 石器	白鳳期の瓦片2点、仏教関連遺物として壺G、鉢形土器、経胎陶器53片、銅製小仏像の台座などのほか、中国産貿易陶磁器白磁の皿、蓋底部片、青白磁の合子片、青磁の餘片、13世紀代の天目茶碗片なども出土。			

敷島町文化財調査報告 第21集

村続遺跡 I

発行日 2004年(H16)4月20日

発行 敷島町教育委員会

山梨県中巨摩郡敷島町島上条 1020

TEL(055)277-4111

印刷 術協和印刷社

